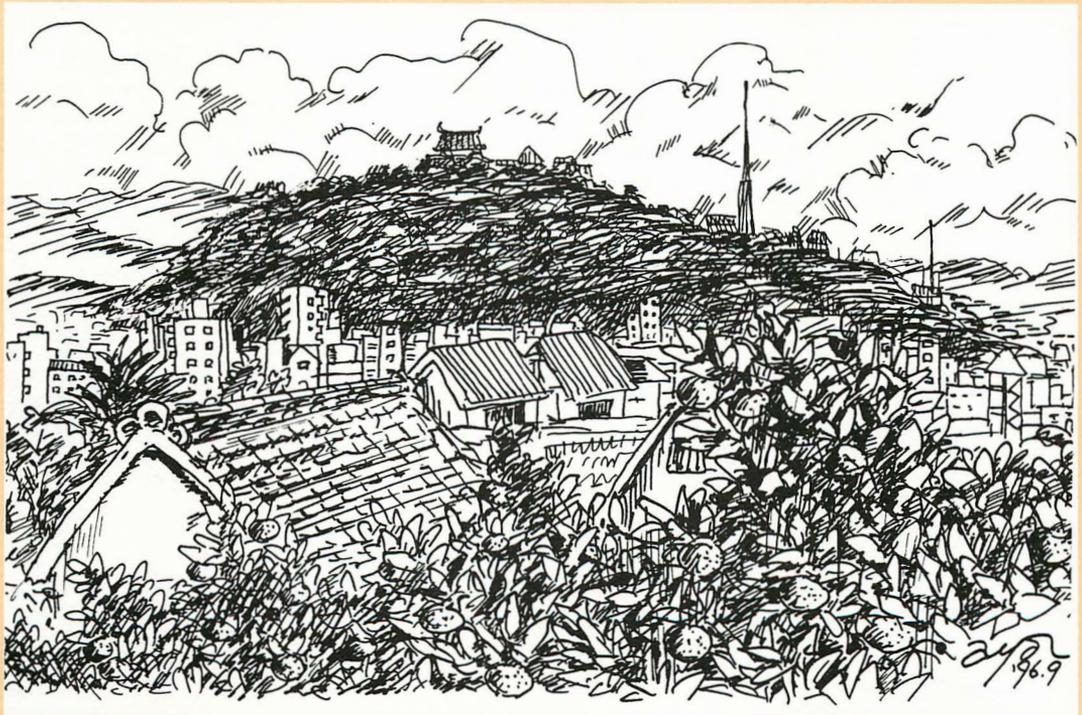


まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

**(財)愛媛県まちづくり総合センター
設立10周年記念**

VOL 50



大峰ヶ台から松山城を
(西山)

理事長あいさつ	…………… (財)愛媛県まちづくり総合センター理事長 愛媛県知事/伊賀 貞雪	1
まちづくりトーク (座談会)	…………… 『これからのまちづくり』	2
	愛媛大学教育学部教授/讃岐 幸治 21世紀えひめニューフロンティアグループ代表/若松 進一 (株) オ フ ィ ス Q /河野真紀子 (財)愛媛県まちづくり総合センター専務理事・所長/渡部 正人	
特別寄稿		
三千人のチャレンジ	…………… 瀬戸町長/井上 善一	14
センターと共に歩んだ研究会議	…………… えひめ地域づくり研究会議代表運営委員/守谷 和久	16
地域づくりの中心は人づくり	…………… 財地域活性化センター 編集顧問/室井 澄生	18
インターネット風な風が吹く	…………… 過疎を逆手にとる会 会長/安藤 周治	20
まちづくりは実践から	…………… 御荘町役場/山岡 強	22
まちセンで学んだこと	…………… 西条市役所/国田 敦彦	23
まちづくりとパートナー	…………… 吉田町むらおこし実行委員会/薬師寺 浩幸	24
まちづくり活動と青年会議所の役割	…………… (社)松山青年会議所/田中 啓文	25
論談—まちづくり—		
構造変動の時代とまちづくりの課題	…………… 松山大学経済学部教授/村上 克美	26
まちづくり雑感		
歩いて見えたもの	…………… えひめ路上観察友の会/柳原あや子	28
マイナスがプラスに	…………… 南海放送アナウンサー/宇都宮 民	29
幸せになるために	…………… 宇和町ボランティアガイド/樫本 夕子	30
研究員レポート		
森のくらしをデザインする	…………… 井上 正男	31
石のかなたに	…………… 稲田 紹	32
まちセン資料集		
まちづくり—言	…………… 研究員OB有志	33
刊行物—覧	……………	34
年譜	……………	35
役員、職員等—覧	……………	36
舞たうん特集テーマ—覧	……………	37

今号のテーマ

「まちづくり総合センター」

設立十周年を記念して

昭和六十一年七月、県内の「まちづくり、むらおこし」の支援機関として設立された「財団法人愛媛県まちづくり総合センター」は、その役割を果たすべく、様々な活動を展開してきておりますが、今年で、設立後十周年となりました。そこで、当センターでは、これまでのまちづくり活動を振り返り、今後の活動指針とするとともに、広く県内各地のまちづくりに活用していただくため、「舞たうんVOL50 (記念号)」として、まちづくりトーク、特別寄稿、論談、まちづくり雑感等のコーナーを設け、当センター並びにまちづくりに縁のある人々に登場していただき、地域づくりの現状と課題、将来の展望等について考えてみることにします。

(編集子 中村)

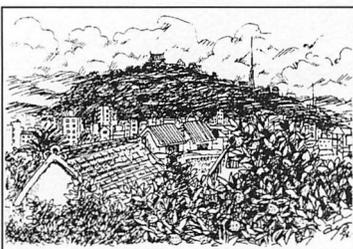
表紙の言葉

みかんの花は、県花と称され、花の咲く頃はほんのり甘酸っぱく、何とも言えぬ、快い香りが漂う。

松山城まで数十分と向かい合う大峰ヶ台のイヨカンの実も色づき、収穫の時期となりました。

今年も味と香りが素敵な愛媛のイヨカンが皆に愛されることでしょう。

柳原あや子



(財)愛媛県まちづくり総合センター理事長

愛媛県知事

伊賀貞雪



財団法人愛媛県まちづくり総合センターは、今年で設立十周年を迎えました。

振り返ってみますと、昭和五十年代に入ってから「地方の時代」が叫ばれるようになり、県内各地においても、市町村や民間団体等によって、個性ある地域づくりが積極的に推進されるようになって参りました。このような中で、当センターは、情

報の提供や企画の立案、人材の養成等の面から、これらのまちづくり活動を支援する機関として、昭和六十一年に設立をいたしました。

以来、ふるさと創生事業や愛媛県ふるさとづくり条例の制定など、個性豊かなふるさとづくりに対する体制が整う中で、情報誌「舞たうん」や「えひめイベントBOX」の発行、全国ま

ちづくり情報のデータベース化、地域づくり研究サロンの開催、地域づくり交流促進事業の実施など、さまざまな取り組みを行って参りました。

そして、今日、県内の地域おこし塾の数が全国一となり、活発な活動が展開されているなど、本県におけるまちづくり、むらおこしは大きく発展をみているところであります。

これもひとえに、市町村や関係諸団体をはじめ、皆様方の格別の御理解と御協力の賜でありまして、深く敬意と感謝の意を表する次第でございます。

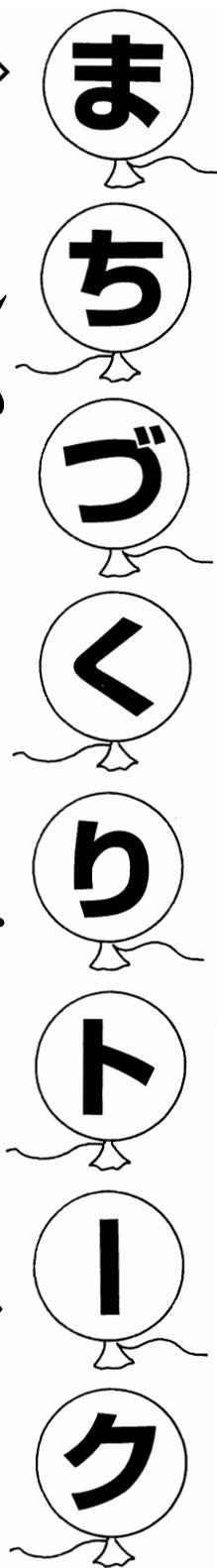
御案内のとおり、近年、人々の生活意識の変化や文化志向、ゆとり志向の高まりなどに伴い、心の豊かさを求めて、地域の歴史や住民文化、産業を活かした、独自の魅力のある地域づくりに対する取り組みが、各地で盛んに行われるようになっております。

また、特に今日、地方分権の時代を迎えた中で、新しい地方

の時代を切り拓いていくためにも、地域が一体となって、自主的、主体的に取り組みまちづくり活動は、ますます重要になってくるものと考えております。

当センターにおきましては、この度の設立十周年を契機として、関係各方面との連携を更に深めながら、今後とも、地域の活性化に欠くことのできない人と情報のネットワークの充実などを通じて、まちづくり活動の支援に積極的に取り組んで参りたいと考えております。

どうか皆様方におかれまして、来るべき二十一世紀に向けて、従来の枠にとらわれない新しい発想のもとに、独創的で個性豊かな活動を展開されますとともに、当センターの活動に一層の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。ごあいさついたします。



◆これからのまちづくり◆

(まちづくり十年を振り返って)

出席者

愛媛大学教育学部

教授 讃岐 幸治

21世紀えひめニューフロンティアグループ

代表 若松 進一

(株)オフィスQ

河野真紀子

(財)愛媛県まちづくり総合センター

専務理事・所長 渡部 正人

渡部 ご案内のように今年で当センターが出来てから十年になりました。そして情報誌「舞たうん」が五十号目になるということから、一度これまでの十年間のまちづくりを振り返って、これからのまちづくりのスタートのための糧にし

ようということ、この「まちづくりトーク」を企画いたしました。本日はお忙しいところを当センターの運営委員である讃岐教授、若松さん、河野さんの三人の方に

お集まりいただきました。

まちづくりの変遷と

その背景

まず始めに、まちづくりというのがどのような形で進んできたか、あるいは、それが、どういう効果を地域にもたらしたか、また、その背景等について、お話し合いをしていただきたいと思います。

まず、若松さんからお願いします。

若松 昭和六十一年にまちづくり総合センターが設立されたということですが、私がまちづくりとか、地域づくりという言葉に耳にしたのは、その頃ではなかったかと思

います。

今までは物づくりが主流であつて、上から下へというのが主流であつたけれど、これでは地域というのが起きないんじゃないかという、一つの反省があつたと思いません。そんな時に、地域づくりとか、まちづくりみたいなものが起つてきて、自らが考えて行動していくことが大事じゃないかという考え方が生まれてきた訳です。

また、地域づくりというものが、あちこちで行われたことを真似するという部分がかなりあつたので、この十年間の流れの中では、格差が生じて序列というのができてきたように思うし、やり残したことがあるんだろうと。

一生懸命やってきたけれど、一時代が終わつたという、冷めた部分つていうのも、最近見られるんじゃないかと思えます。

渡部 地域自らが何かをやらなきゃいけなくなつたという背景が、日本の社会、経済の中にできたという事は「都市化」という現象の中に、地域が上から支配される

ような社会体制が持たなくなつてきたということがあるのと、都市に価値あるものが集約されて、人間の故郷であるべき所の価値が、見失われ、忘れさられ、衰退していったという現象が起こつたということでしょうか。

若松 そうですね、東京と地方という二つの両極ができて、全国総合開発計画をきっかけとして、都会に集中していくようになったと思えます。



讃岐教授

渡部 あの高度経済成長によって、乱開発が進み過ぎて、人間が住んでいく環境とか、定住する意識というものが薄れてきた。

落ち着いて考えて見れば、人間が主役であるべきはずの環境というのが満たされなかつたというところで、一つの見直しが行われたということでしょうか。

河野 それまでの時代の流れと比較して、昭和三十年位から今までの流れというのは速過ぎて、何か地に足がつかないまま、開発なり、成長なりがあつたように思えます。

渡部 自分たちの常識っていうものが追いつかないという時代があつたんです。

河野 都会に行つたほうが便利だし、裕福になるみたいなの。だから人が流れてしまい、地方と都会ができ、格差ができてしまつたという事になって、それがあまりにも速かつたということでしょうか。

讃岐 昭和三十四年頃から、人、物・金の集中する大都市に向かつて、移動する時代が続きましてか

らね。昭和四十年代は、正に民族大移動の時代で、「一都栄えて万村枯れる」という状況だったのではないでしょうか。

若松 十年一昔が、一年一昔という形で。結局、流れが速いことに田舎がついていけなかつた。

人は減り、高齢化がおこり、第一次産業が駄目になっていくという流れの中でこのままだったら、地域が潰れるんじゃないかという危機感というものが、十年間の地域づくりっていうものに拍車をかけてきたことは、事実だと思えます。

河野 それは、根本にあると思えます。

私の場合、まちづくりというのは、新聞紙上とか、イベントなどで、あそこもそういうことをやるのかという程度にしか知らないんですけど、イベントや村おこしの色々なものをするにも、人がいなくなつたので制約があるというのは、住んでる人にとって、一番の危機感になつてくる気がするんです。

まちづくりの

現状について

渡部 地域で、肩を組んで生活をしてきたんだけど、組む相手がいなくなってきた。物質的な富を求めて、都会に若者が出ていった。それでは駄目なので、残っている者がどうにかしようということから、まちづくりっていうものが、起ってきたんでしよう。

竹下内閣の時に、ふるさと創生

事業というのがありました。まちづくり関係者の方々にとって、何か事業をやってみようかという運動が、地域で広がっていったということ。これは、事実でしょう。あれは、かなり評価されるような政策だったんですかね？

若松 政策としては、面白い発想だと思うんですけど、中身を見ると、温泉、イベント、人づくりという、ふるさと創生三種の神器、ってよく言われる位、どこもそういう風なことをし、またイベントをやる時には、東京の理論が

先に勝って、三千何百ある市町村に一億円おりたけれど、逆にストロ現象として、吸い寄せられたということがあると思います。

しっかり受け止めて、地域を起していこうという運動をやった所には、一億円の効果は、実を結んだと思います。

私の町でも、アンケートを採りました。今まで、行政がお金を使う時に「あなた、この使い方がいいでしょうか？」と聞いたことは、なかったと思います。その中の「ベストスリー」に一億円をかけてやってきたことで、地域が起きるきっかけになったことは、事実だろうと思います。それが、コンサルにまかせたり、東京の人達におまかせをして、「一億円で何かやってくださいよ」という所が非常に多かったということを知っています。

渡部 自らが発想して実行すると



河野さん

いう、根本の事柄に対してなかなか追いつけなかった地域の実態というものがあつたと言えます。

河野 何か同じ様なことを、色々競争しあつてたという感じが、外から見ててもありました。

渡部 田舎特有で、都会の人を引寄せさせるための装置づくりということ。これは、限られるのかも分からないけど、発想の貧困性というものがあつたんじゃないでしょうか。あの年だけ、一億円を使えとい

うのではなく、一億円使えるような時代になったら使えという風にした方がよかつた。

若松 基金にしておいて、考えられる時に、やっつけていこうという所もあつたわけです。当時としては、よそが使うのに、うちはアイデアがないのかなあつていう感じ。河野 確かに起爆剤になつたと思います。

このままでは、村や町はいけないんだから、どうしたらいいんだらうと、みんなで議論をしましたから。でもまだ、それを使つたり實際色々するには、町づくりや村づくりに対する考え方が、青かつたという感じがします。

若松 結局、ハードっていうか、何かを造つて、目に見えない都市の人達を呼び込もうという動きが強すぎたと思うんです。

ただ、自分の町の人達が、自分の町をどうするかというよりは、例えば、観光に無縁だった所が、ふるさと創生一億円もらつたから、何かを造ろうということ。そして、結果的には、人は来なか

ったということなんでしょう。

河野 人集めっていうのが、村づくり、町づくりみたいな感じになってましたから。

渡部 観光というのが、一番手っ取り早いという時代がありました。それも、成功した所はいいんですけど、立派なものを造っても、いつも施設は、空っぽであるという所も多いですから。

讃岐 一億創生事業以前は、霞が関で考えて、その案通りに地方は実施する時代でしたから、勝手にユニークなアイデアを出したり、実行したのでは、補助金まで切られる時代だったわけです。

ところが、この事業によって、初めて地方が自分の地域をどうするかを考え、自分の地域ならではの特色を活かしたアイデアを出すことが要求され始めたと言えます。

若松 今まで競争のなかった地方に、競争っていうのをあおったというのはよかったです。でも、当時としては、よそがやるし、隣がやるし、隣に負けたらどうするという社会をつくってきたと思

うんです。そこに一つのひずみが出来てきた。これからは、競争から交流の時代に行くんだということが分かってきたんだろうと思います。

本場のまちづくりっていうのは、決して外向きだけの目だけでなくて、内なる人達が、どう楽しめばいいのかという部分も分かってくるだろうと。

河野 たしかに、住んでる人達が、楽しくいきいきしてないと、そ

の町がいきいきしてるとは、言えないですね。

若松 財布を豊かにすることに、思いを寄せ過ぎて、心が貧しくなったら、本当の豊かさなんてないんだよということに、気がついてきたと思うんです。

河野 確かに、気がついてきたっていう、十年の歴史ですね。

讃岐 まちづくりのポイントは、孔子のいうところの「近きもの悦び、遠きより人來たる」ということではないでしょうか。

若松 人間が人間らしく豊かに生きるということは、何なのかという問いかけが、活動の中で、随分整理されてきたんじゃないかと思えます。でも、かけがえのないものを失っていることもあるんです。そういうことに走ったために、

豊かといわれる田舎の自然が壊れてきたし、子供の数が減って、学校の統合、廃校が繰り返されてきたり、若者が流出したりといった、取り返しのできない「付け」というものをつくったことは、事実だろうと思います。これを、どのよ

うに取り返していくかということなんです。

昔は、ゴミの問題なんて都市間題だったでしょう。でも今は、普通の主婦の人達が、「ゴミ問題はもう少し、身近で考えとかなないと大変よ」みたいに、自然に話せるようになったし、仲間だけじゃなく、もう少し広い範囲の所で、私の主張も言ってみようみたいな感じの組織型のまちづくりをやってきました。今からも、行政がやる場合には、変わらないと思います。でも、「この指とまれ」のまちづくりっていうのは、ここ十年間で広がってきたと思います。

規約も何もない中で、自分たちの生活をより豊かにしていくためには、どうしたらいいのかということを実験に考えていくような。

河野 その中に入っていると楽しみもいっぱいあるでしょうし、お友達に引張られてかも知れないけど、やってる内に自分の生活に活かされてくるということで、楽しみが増えて、それが広がることになると思うんです。



若松さん

一歩踏み出すのが、女性は遅くて難しかったけど、後押しできる態勢も整い、踏み出す勇氣を持つ

ことが出来るようになったという意味で、女性の活躍と一緒に頑張らないかと思うんです。

まちづくりにおける

住民参加について

渡部 まちづくりっていうのは、

地方自治体の本来の役割、目的でもあるわけなんです。そして、これからは住民参加ということが、大切なことだと思うんですけど、

現実には、住民参加というのは、やはり地域では、役所が音頭をとって、何かしむけていかなかったら、なかなか動かないという実態もあるんでしょうし、そのところははどうですかね。

河野 一番、手取り早くって、やりやすいのは、そういう方法なんじゃないですか。だけど、「文化的なことをしよう」って言ったら、グループの中のこういう班が動く、スポーツなら、こつちが動く、そういうトータルな窓口みたいなのが、本当は、必要だと思うんです。行政の方っていうのは、

それが、なかなか出来なくて、その行政側が、何かをする組織づくりや、役づくりをすると、田舎では、同じメンバーになっちゃうんです。

渡部 住んでる人々が、おまかせ主義みたいな所があつて、まだ抜け切れない所もありますが、それを脱却していくための住民参加ということ、どのようにして考えていくか。リーダーを務めてきた人たちの役割というの、非常に大切だと思います。

河野 それと、何を住民が、したがつているのか。例えば、観光客をもっと増やして財布を豊かにしたいのか、今の生活でこういう風にした、もっと、文化的なことをとか。

何を、住民が、一番の村おこし、

町おこしと思ってるかというの、把握しにくいでしょうけど、それが分かっている所は、住民の気持ちも動かして、色々できますね。その辺が難しいんじゃないかと思っています。

若松 行政の在り方が今問われると思うんです。今までは、橋をつけ、道をつけ、産業おこしをすればよかつたけれど、そういったものが出来上がってくると、「より豊かな生活を営むために」とい

うテーマの中で、行政がソフト化したり、文化化していく訳でしょう。

ですから、そういったことが、分らないと、地域づくりっていうのは、出来ない訳ですけど。それを今、模索してるし、早く考えてやってくる所は、地域づくりが進んでるし、いい町づくりがやられてる所は、住民からも指示されるということになってくるんだらうと思うんです。

讃岐 ライフスタイル自体、"to have"から"to be"に変わってきましたからね。金や地位などをいかに多く持つかという時代から、いかに感性豊かにいきいきと生きるかという方向に価値観も変わってきましたからね。

河野 橋が出来たり、道路が出来たり、観光客が増えたりするのは、目に見えますね。これからのものは、目に見えないものを、少しずつ発展させないといけない。

昨日よりは、色んな知識を得て、目に見えない豊かさみたいなのを追求しないといけないから、まち



渡部所長

づくりっていうのも難しいだろう
なって思うんですね。

渡部 お互い楽しく住むようなま
ちを創っていいんじゃないかとい
うことを仕掛けていく人が多くな
ればなるほど多様な地域設計がで
きるんじゃないかと思います。

ところで、まちづくりに関連す
る人達が集まった、「えひめ地域
づくり研究会議」、というのがあ
り、連帯して地域づくりを進めよ
うと、「風おこしの誓い」という
盟約を出しておりますが、どうい
う風に、発展してきているんで
しょうかね。

若松 愛媛には、そういう地域づ
くりとか、まちづくりっていうも
のを、一つに束ねるものがないっ
ていうことで、私も結成に参画し
た一人だし、今も代表やっている
んですが、ネットワークっていう
のは、この十年随分進んできた
と思うんです。

住民の生活の場が、どんどん広
がって、自分の町一つだけで、ま
ちづくりを考えたりすることがで
きなくなってきた訳です。例えば、

産業文化会館というのが出来て、

「文化」っていうのは、あそこを
集積的にやりますよというネット
ワークが出来てくる。もう、ネッ
トワークなしでは、生きていけな
い時代になってきたと思うんです。
その「はしり」として、研究会議
というのは、産声をあげてきたん
だろうと思います。

ところが、これだけで果たして
いいのかってなると、テーマが非
常にしぼりにくくなってきたって
いうことなんです。

地域づくりのネットワークって
いうのも一つの曲がり角に来てる
んじゃないかと。言い替えれば、
研究会議が、今後、生き延びてい
くためには、もっと一人一人が自
立できるような能力を高めていく
ということ、今までは、三百人が、
一つの目標に向かってやっていこ
うかという時代だったけれども、

これからは、「手つなぎの連帯」
よりは、「手ばなしの連帯」って
いう時代になってるんだろうと思
います。

こういった住民活動とか、まち

づくりっていうのは、地域が自立

し、自分が自立した時、初めて、
自分たちの生活が豊かになってく
るんだということへの「気づき」
が今頃になって、出来てきたのか
なと思つてます。一人一人がネッ
トワークを利用して、フットワー
クをつけていくという。

研究会議なんかも様々な切り口
で活動をやってるんですけど、三
百人全体が、別々の行動をやるこ
とを一つに束ねようとするものが
ある意味では、組織のまとまりの
悪さになってきてるんじゃないか
と思うんです。

河野 自立も難しいでしょうけど、
更にそれを継続していくっていう
のが、非常に難しいですね。難し
くても全体を束ねられる何かの
窓口だったり、組織というのは、
必要ですね。

若松 愛媛県内では、地域づくり
で、ゴミの問題とかのテーマに基
づいてやってる組織は非常に強い
んですけど、いくつかが問題を、
地域づくりという束ねの中で、や
っていく団体っていうのは難しい

なあと思うんです。しかし、束ね
ることの意味っていうのは、次の
世代にどんなものを残していくか
という視点から考えていくと、研
究会議の生き方っていうのが、こ
れから、大事じゃないかと思うん
です。

河野 例えば、私の住んでいる久
万町を見ても、イベントや、まち
づくりの中心になってる人がいま
す。あの人がいると、イベントも
ノウハウも知ってるし、大丈夫だ
という安心感もある。

しかし、中心になる人だけだと、
どうしても、一人よがりになって
しまつて、次へ結びつかない部分
っていうのはありますね。行政でな
い方達は、全てボランティアとい
うことになるでしょうし、行政の
方も、ボランティアの部分でやっ
てらっしゃるでしょうけど、色々
知って楽しい人だなあとこの部分
を、伝えていっていただかないと。
若松 今までは、「三島」って言っ
て、半島、離島、孤島っていうの
があるでしょう。ここで地域づく
りっていうのは、非常に活発にや

られたんです。

これからは、自分の町と隣の町と競争する時代から、共生ということを考えて、しかも、共有の部分、共通の部分の切り口でネットワークされていくことが必要だと思っただい。

それまでは、文化ホールを造るという運動がおこった時に、一つの町に持たなければ、満足しない時代があったと思っただい。でも、今は、そんなこととしてたら、その地域の特徴も何もなくなつて、投資が分散化してしまうわけだ。

文化ホールっていうのは、郡内に一つでええわ、ここにしましように。ゴミは、どこにしましように、一つの流れが出来てきたし、これをやらないと、生きていけないと思っただい。隣の町と垣根をとつばらつて、どうしたら、自分たちが、幸福を共有できるかという部分を、しっかり見つけて、生きて行かないと、地域っていうのは、成り立っていないと思っただい。

讃岐 単なる交流でなくて、それ



(平成8年10月2日、センター会議室にて)

ぞれの特性を活かしながら、協同しながら創造していくという「協創」の時代に入つて来ているのでしよう。今後は「協創」のネットワークづくりが必要だといえます。**渡部** お互いに、補完しあうつていうようなシステムづくりが必要になつてくるでしょうね。

愛媛県には、まちづくりについての人材が、各地域にいらつしやると思っただい。その人たちに、地域の中で自立していくような仲間づくりが出来ていくように、活動していつていただきたいと思っただい。

若松 愛媛県内の地域づくりの人で、活動家と言われている人は、昭和十五年から二十五年に生まれの人が多いいです。何でかと言つと、戦前、戦後、終戦というものを挟んで生まれ、ハングリー精神の社会の中で育つたからなんです。私も昭和十九年生まれですけど、だいたい、その間で集中していただい。

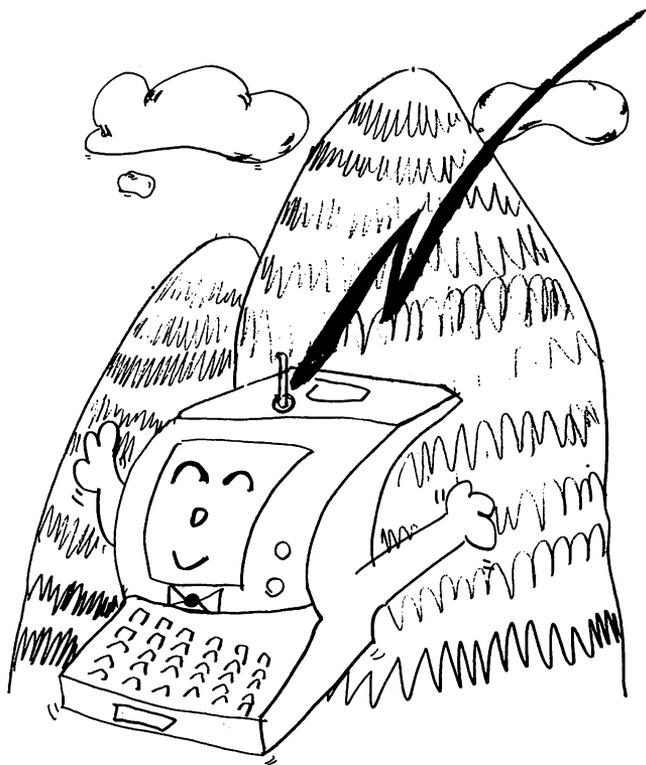
でも私は、そろそろ世代交替いのか、そういう思想を受け継い

で、新しい感覚のまちおこしをや
ってくれる人たちが必要になっ
てきていると思うんです。具体的
に言うと、昭和二十五年から三十五
年位に生まれた人たちですけど、
その人たちが、どんなに育って
んだろうと考えると、自分たちは、
一生懸命やってきたけれど、後ろ
向いたら誰もいなかったという
部分があるんじゃないでしょうか。
十五年から二十五年の人たちが、
やってきたバトンを誰に渡すの
かという、バトンの渡し方と渡す人
を今の間に育てていかないと、愛
媛というのは、良くなって来ない
だろうと思うんです。

るし、活力も出て来ないと思うん
です。
愛媛県では、生活文化若者塾、
女性塾というのを、市町村ごと
開設をして、支援を行っているん
ですけど、そういう人たちの自立
的な活動、自主的な運営という点
を、その地域の若い人たちに、呼
びかけていくというか、そういう
活動が広がるように、期待をして
るんですけど、「熱」を持つて
年代の人たちの「熱」とは違っ
て、冷めた感じで、外見では分から
ないですね。
河野 私は、そういう若い人た
ちも、まんざら捨てたもんじゃな
いと思うんです。結構、一生懸命、
自分の好きなことに関しては、や
ってらっしゃいます。
例えば、インターネットだっ
たりすると、久万町の山の中でも、
海外と、ちゃんと電子メールした
り。その方たちの話を聞くと、
久万町の自然の昔からのいい所も、
十分に分かってらして、生活も仕
事も趣味も楽しみながら、表には
見えないけど、ちゃんと、まちを

おこしてると思うんです。だから、
情熱の表われ方は違うけど、無く
なった訳ではなくて、久万町の地
元をこういう風にしたいたいという気
持ちも、ちゃんと残っているし、
まんざら、捨てたもんじゃない
と思うんですけど。

のが、色々発展して、違った分野
にも、目を向けていってもらうと
いうことが、必要なんじゃないか
と思いますね。
河野 私たちの年代、ちょっと、
狭間の世代かもわからないんです。
だから、もっと若い人たちが、色
々とやらないといけないと思うん
ですけど、もう一つ積極的に出来な
い部分もあったりして、時代の背



景みたいなのも、あるのかもしれないですね。

渡部 社会的に、経済的に、そういう時代を経てきた世代の違いでしょうね。

若松 今、県では、生活文化若者塾とか、女性塾とか随分力を入れてやってるし、意味も分かるんだけど、少し型にはめた育て方っていうのが、あるんじゃないかと思います。私も仕事柄、あちこちの若者塾や女性塾等へ行きます。確かに今の若者塾や女性塾の成果は、認めるけど、枠にはまった活動だけでは、若者たちは育って来ないんだろうと。

あちこちの塾に行って、思うんですけど、「学びの心」っていうのが、ないですね。拡がりがないし、「自立の心」っていうのも、育ってない。僕らが考えてる若者像と彼らが思ってる若者との意識のズレっていうのは、あるだろうと思うんです。それを、もう少し理解して、新しい育て方の枠組みをしないといけないのかなと思います。

渡部 啓発が、画一的であるというような感じですか。地域を変えていこうという意識を、助長するために、行政サイドは、試みてるはずなんですけれど。

若松 ですから、個人の個性を尊重していくことと、地域の個性っていうのが、これから生きてくるだろうと思います。普段から「夕日によるまちづくり」なんて言ってる、十年やると、それが物語になったり、話題になってくるんです。

どこでも一緒の画一化した若者を育てたり、その地域をつくっていくのではなくて、地域の宝物をどう探していくのかっていうことでしょう。

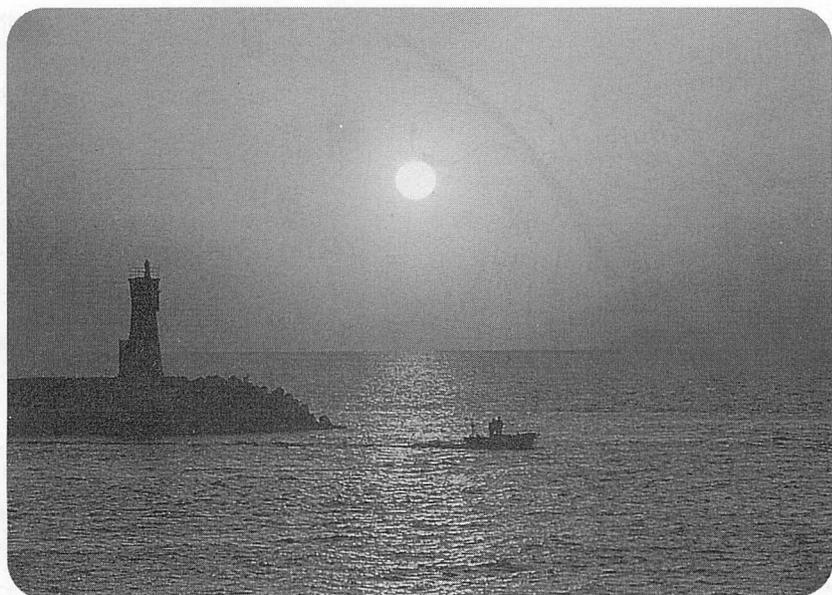
渡部 今までは、物をつくる、名物をつくる、名品をつくるということで、一生懸命、産地づくりみたいなものに励んできたことは、事実です。それが「物づくり」から「物語づくり」みたいな形を心掛けていくとその地域の文化になつていくんだということでしょうかね。

若松 今の若者が、果たして、何を

を求めているのか。

例なんですけど、私の町で、「夕焼けコンサート」を始めまして、行政も、住民も含めて、コンサートやったことないんです。でも、

今までやったことないから、行政もできなかつただけのことで、一回やって気がついてみると、結構、想いを寄せる若者がいて、「虹」っていうバンドが出来てみたり。



双海町の夕日

ただ、今の私

たちの社会は、若者の文化を理解しないという所がある、もつと、若者にそういった想いをさせていくと、自分の町の想いが伝わって、「自分の町っていうのは、こういう所なんですよ」と主張できるだけの力をつけてくるんじゃないかと思うんです。

河野 若い人自身で、何を欲してるのかというのを、探してる状

態の所だから、それを、違う年代が見つけようとするのは、難しいですけど、一緒になれば、わかりやすい。

渡部 久万町はとうですか、お住みになって。

河野 私自身も久万町で育ってるんです。松山市の学校に行き、仕事をし、結婚して、久万町で育った年頃の子供を連れて、久万町へ帰ったんです。自分の子どもが、私がやってた遊びと同じようなことをしてたりすると、すごく、嬉しんですよ、母親として。

だから、久万町で子どもを育てるのに、自信がもてる。松山市で育てたときは、街の真中に住んだから、色んな制約もあったし、このまま、まっすぐに育つのかどうかという不安な時期もあったんですけど、久万町に帰って、その子たちを見てると、自分が育った時の環境で遊んだり、育てていて、違う方向にいつても、何か言ってるかなみたいな。住んでる人たちも、適度な文化度や自然があり、「久万町が一番いいわ」

っていう意識は、持ってるんですけど、それだけで満足していいとは思わないんですけど、久万町に住んでるっていうのを誇りに思えるのは、幸福なことだと思っんです。「ここに住んでるのよ」って言えば、「田舎の暮らしは、素敵なのよ」って、誇りを持って言えるような気がしますね。

若松 私も、夕日なんか子どもの頃から見てますから。久万町の人

が、木を見るのと一緒です。ある日突然、双海町に来た人が、「あんた、この夕日きれいだよ」って言われて見ると、「ああなるほどなあ、夕日ってこんなにきれいなのか」と思った時に、自分の町の夕日の良さってのに、気付くわけです。これは、外の人に教えてもらって「気づき」だろうと思っんです。「それを、どう表現したらいいの」と言われた時に、町の人達には、ノウハウがないんです。「じゃあ、どうしたらいいのかな」って言われた時、文殊の知恵で考えて、外の人たちに「こんなことも、あるんじゃない」と

言われて、コンサートが生まれてくる。「じゃあ、コンサートをするには、どうしたらいいののか」。階段を上るようにまちおこしながらものは、出来ていくから、自分たちだけで考えなさんな」と、「みんなの力を借りて、自分の町をど

これからの

まちづくり展望について

うするかということ考えた方がもっと楽だし、いい町ができる」ということを、つい最近言ってるんですけど。

河野 ネットワークだったり、交流だったりっていうのも、すごく大切になるんですね。

渡部 愛媛県の各市町村は、それなりの理想像を掲げて、まちづくりを行っているし、元気な市町村

が島でなくなる日」というのが一番関心事だと思っんです。

が多いと思いますが、今世紀中には、瀬戸内海大橋が完成し、広島県と陸つづきになり、今後さらに広域的な交流、連携というものを、視野に置いたまちづくりが必要になっってくると思います。そういう点では、特に島しょ部では、まちづくりの在り方が変わってくるんじゃないでしょうか。

若松 今、島民は模索してると思っんです。私はいつも「橋がかかってからでは遅い」と言ってるんですけど、島民にとっっては、「島

地域の人たちが、島という文化と、今まで培ってきた何かを残していきたいという気持ちを持たないといけない。島に住んでる人たちが、便利になって、経済圏が広がっていくと、島を生活の拠点にしないんじゃないかという危機感というのは、持つべきだろうと思っんです。

その時にどうするか。そこに住む人たちの住み心地というか、住むことの意味っていうのを真剣に考えないといけないのかなと思っってます。

これからのまちづくりの展望についていうのは、二十一世紀に向かつて、環境問題とか、人の問題とかを含めて「五感のまちづくり」みたいなものがあるんだろうと思うんです。

例えば、風なんて流れてるだけなら、風なんです。それが、頬に当たったり、何かをゆらすと、風に見えて来るといいう、「内面的なまちおこし」っていうんでしょか、こんなものが、二十一世紀までに、やられていくんじゃないかと。うちの町には、「悪風」という風が吹いてきたけれども、あの風が、風と土という出会いによって風土というものが、生まれてくるとしたら、風の部分がわるだろうと思うんです。

河野 まちづくりの変遷みたいなお話しをしていった時に、まちづくりがこれではいけないということになったのは、便利でお金があるのがいいんじゃないかって、もっと人間らしく、「気持ちのいいこと」っていうのを追求していく必要があることに気付いたからだと思います。

ます。人間の動物の部分で、気持ちがいい部分を。

渡部 地球の中の生き物っていうことを、もう一度、思い出そうと。河野 なんか方向がだんだん決まってくるような気がします。

渡部 特に島とか、過疎が進んでるような所は、それが自分たちの生きていく好適条件であり、アメニティを具現化していくと、五感がきちんと機能するような環境づくりみたいなことになっていくのかなという感じがします。

若松 自分のライフスタイルにあった人生観なり、人生の過ごし方っていうのが、出来るようなこと。高齢者にやさしいまちづくりであるべきだろうし、子どもには子どもの発想のまちづくりがあるだろうし、例えば、六千人いたら六千人の人が主役で、六千人一人一人がそうだったことを、感じられるようなまちづくりっていうのを

目指そうと思うんです。そのためには、「エリア構想」っていうのがあるんです。上浮穴郡なんかも、典型的な「エリア構想」でやって

ます。

隣近所の町が相互に補完しあうという社会が成り立っているんです。そういうことのお手伝いを、どうサポートしてあげるかということも、必要だと思うんです。

渡部 そういう装置づくりは、行政が主体性を発揮し、リーダーシップを発揮するでしょうけど、運営していくのは、地域の住民が主体になり、行政と住民が、パートナーとなった地域づくりを心掛けていくというのが、地域を活性化させ、豊かにし、住み良い社会にするということだと思えます。

今は、国際化とか、女性の時代とか、言われてるんですけど、女性の役割というのは、非常に大きいと思います。河野さん、何か、マスコミにおられた体験とか、女性の立場から、どういう風に方向づけをしていけば、いいとお思いますか。

河野 実感として、非常に女性は、ラッキーじゃないですか、色んな意味で。男性は、外に出てないといけないけれども、女性は、仕事

をしようと思えば、仕事一本やりででき、逆に仕事と家庭と、両方持ってしまうと思えばそれもでき、また、専業主婦もできるといいうな、今はそういう社会だと思えます。ですから自分で選べる選択肢を、残してもらっているというのを意識して、社会的に参加しないといけないんじゃないかと思えます。

渡部 まちづくりなどは、女性の発言というよりは、男の方のリードでやられてきたという形はあると思うんです。今後は女性が前面に出ていくことが、男女共同参画型社会のステップじゃないですか。

河野 そういう風になっていくんでしょけど、まだ出来てない。出来てないというのは、考え方を変えれば、幸運な面もあると思ってるんです。自分で選んで色々できやすいから。ただ男性と同じようにしようと思う人にとっては、まだ駄目でしょうけど、選択枝があるというのは、女性にとってもラッキーな時期に来てるんじゃない

かと思うんです。

渡部 多様な人間の生き方っていうものは、あるかもわからないですね。ただ、社会的には、ある意味で、男が疲れて、女の人にまかすということになってきてるんじゃないでしょうか。

河野 かもしれないですね。けど、同じようになるっていうのは、女性には、子どもを産み育てないといけない、もちろん育てるのは二人ですけど、子どもを産むという生理的な違いがあるから、まったく、同じというのは、違うと思うんです。また、女性が、社会に出る分、男性は、家庭のことをして当然なんですけど、なかなかそうはいかない状況があると思います。

若松 今までは、男の比重が非常に重くて、七対三くらいな形で社会的になってたのが、五対五、六対四とかになってくるでしょう。これからの地域づくりだってそうだと思います。

渡部 それでは、最後に何かこれからのまちづくりや当センターに

対して、こうやるべきだ、こうやってほしいというご意見がありましたら、お願いします。

若松 ここを研究会議で、よく利用するんだけど、この条件というのは、三つしかない。活動支援、情報提供、人材育成、この大きな仕事を更にやってほしいと思います。

河野 まちづくりで大事なものは、「交流」だと思います。

久万町では、丸瀬布町という北海道の町と、役場の職員を、半年なり、何年か交流させてるんです。研修から帰ってきた人の話を聞く



と、すごいためになってると。同じような規模の町ですから、同じような悩みも持っていたりして、だから「交流」というのは、大切だと思うし、それで、自分の内面とどうか、足元を見るきっかけにもなると思います。

讃岐 まちづくりについては、従来のシンポジウム、フォーラム等を脱却できないか、また「匠」を切り口としたまちづくりを考えられないか、そして「学び」についても、生涯学習のからみでまちづくりは考えていけないといけない等、色々と検討すべき点が多い

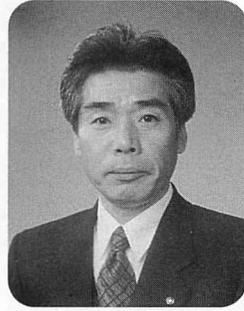
と思うし、センターについては、交流・連携を支援する拠点としてさらに頑張ってもらいたいと思います。

渡部 本日は、お忙しいところを、「まちづくりトーク」に、お集まりいただき、貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。今日のお話しを参考にしながら、今後のセンターの業務等に役立て、まちづくりの支援機関として、頑張っていきたいと存じます。今後とも、よろしくご指導いただきますようお願いいたします。



特別寄稿

『三千人の チャレンジ』



瀬戸町長

井上善一

昔、学生時代に「西洋の小麦、日本の米」という講義を聴いたことがある。それは、西欧人は遊牧民族で家畜を放牧しながら広い野原を移動する民族であり、一定の場所に定住することにこだわらない。一方、日本人は元来、農耕民族であり、狭い農地を耕作しながらそこで生活する定住性が求められる民族である。そのことが限られた農地で高い生産性をあげることができたことに繋がっていると、そしてそこに稲作を中心とする農耕文化が育まれてきたと。

しかし、今、日本の農山村の多くでは、長い歴史の中で営々と築

かれ育まれてきた農耕の伝統文化を継承できなくなってきた。

瀬戸町では、高校生を含めて子供が一人もいない集落がある。伝統文化の継承どころか集落そのものの存続ができない所まで過疎が進行している。日本では少子化が叫ばれているが、地球上では人口増で二十一世紀には世界の食糧危機だと言われている。我々農山村で食糧生産に携わる地域では、生産人口は年々高齢化し、農地を守り、生活を維持することが限界に近づいて来ている現実を見ると、今までは違う視点でその対策を講じることが必要な所まで、危機が

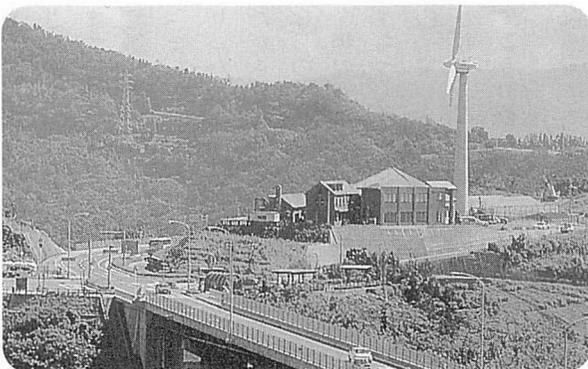
押し迫っている。日本農業を守り、食と緑の産業を守り育てる為には、そして、工業先進国であると同時に農業国として生きる為には、価格補償制度とか若年経営者に対する生活補償制度の創設等の対策が必要と考えられる。

国土の均衡ある発展のためには、それぞれの地域で歴史・文化・風土・伝統に裏打ちされた個性的で魅力的な農山村、他産業と比して劣らず堂々と成立し得る農業を営む田舎に対する対価として、そんな制度があってもいいのではないかと思う。

戦後五十年、世界に類を見ない経済発展を成し遂げた日本経済であるが、所得水準の地域間格差や過疎や過密は解消されるどころか、尚一層拡大している。

現在、国の方では次期全総の計画づくりの作業が、国土審議会計画部会で行なわれている。その中で「物の豊かさより心の豊かさ」、「生活の利便性より自然とのふれあい」と国民の価値観の変化を指摘し、また「レジャー・余暇生活

の重視」、「居住における地方志向の高まり」、「組織の帰属より、個人・家族の重視」とライフスタイルの変化を示している。これらを考えあわせると、これからの時代はまさに地方、とりわけ今過疎に悩んでいる農山村が、日本人の新しい価値観やライフスタイルにピッタリの地域であり、二十一世紀は農山村の時代であると言えるのではないか。



道の駅・瀬戸町農業公園



佐田岬リゾート（別荘分譲地）瀬戸町・大久

二十一世紀の生き残り戦略、「三千人のチャレンジ」これが町制施行四十周年を迎えた瀬戸町のテーマである。行政を預かる者として、人口の減少を嘆かない訳にはいかないが、私は人口の大小よりも、瀬戸町に生きる価値を持った住民がどれだけいるかが将来に向かつての町を支える大きなパワーであると考ええる。

今までの発想は、町で生まれ育った人間をどれだけ町の中で吸収できるかであったが、これから、必ずしも瀬戸町にこだわらず、幅広く農業を愛する人、漁業に従事したい人、瀬戸町という町が好きなき人達に町民になっていただき「選択的土着民」として、定住できる環境と条件を整備することと併せて、その情報を発信していかなければならないと思っている。今までは、ヒト・モノ・カネの全てが田舎から都会へと一方通行のみで流れて来たが、これからは都会から田舎への反対側の流れを生み出す必要がある。

時間・人情・緑・・・等の都市

にない反対側を「豊かさ」と評価する時代の足音が少しずつ近づいて来ている。佐田岬半島の頂上部を別荘分譲地として開発しているが、年々着実に別荘が建築されており、中には定住者として瀬戸町民になられた方もいる。町民の中には、何故？と不思議に思う人もいるようだが、それが今の時代であるということを物語っているのではないか。

今、町の中にあるものをそれぞれ資源として評価認識し、活用する創意と工夫が求められている。そして、それは誰がするのか、町民であり、三千人のチャレンジである。



特別寄稿

『センターと共に歩んだ 研究会議』



えひめ地域づくり
研究会議
代表運営委員
守谷和久

（愛媛県まちづくり総合センターが昭和六十一年七月に設立された。）

私は翌月の八月初め第八回四国川之江紙まつりの、割と大型のポスターを持ってセンターのドアを開いた。あまり感じの良いオフィスとは言えなかった。しかし、応対したスタッフは感じが良く……と言うより、少しとまどったように所長を紹介した。

初代宮本所長は感じが良い……と言うより、少し難しい顔をしたり、人なつこい笑顔で、丁寧に応対して頂いたことを覚えている。

オフィスは県民文化会館隣の農

業試験場の一室（2F）を間借りしており、広くはあったが、”みすほらしい部屋”という感じであった。ただパーキングは充分にあり、センターに用がなくとも、県民文化会館へいく人々も駐車場がわりとして使っていた。そのついでにセンターでお茶を飲んで所長や研究員と雑談をして、まるで喫茶店がわり？ にセンターを利用していた。駐車場とお茶のメリットだけでなく、所長以下研究員の皆さんは、時代の半歩先に行く、自由な雰囲気と、知らないことの強さと、二十一世紀に向けて何かが起こることを漠然と感じ取って

いたように思えるフシがあった。何度も言うが部屋はキタナかったが、これから起こる”地域づくり”の嵐の予感に満ちていたのか、そのキタナさが、逆にしゃれたオフィスにない、ある種の熱気の高まりを感じさせていた。センターに集う人々が多くなり、人々の夢や思いがコンセントレートされていった。

時代の変わり目も、すぐそこに来ていたし、その変わり目に居合わせた人々は会うべくして会った人々だと、私は信じている。

センターが設立された年の十月二十三日～二十四日に記念すべき「内子シンポジウム86」が開催された。

ローテンプルグ市長、高山市長、読谷村長、清成法政大教授、三村京大教授、木原千葉大教授、旅井県研修所講師、小布施堂社長（全て当時）という、そうそうたるパネラーを集め、あの内子町が主催でシンポジウムとやらをやったのである。当時大洲市の隣の町が内

子であった。あくまで隣り？
県外参加者一二七名、県内三二六名、計三三三名を内子座に集めた。

内子町はこのあたりから若きリーダーと参謀に恵まれ、人と町が確実に変わっていくのである。

この歴史的？なシンポジウムに当時のセンター職員全て、参加している。

また研究会議の中核になる人々も数多く参加しているのである。続いて、センターが、本格的に地域に出かけたのは昭和六十一年十一月前後である。東・中・南予の各ブロックに所長以下研究員全員とアドバイザーの先生二～三名で乗り込んできたのである。題して『地域づくり活動者交流集会』地域づくり東予のあれこれ』に私は引つ掛かった。一泊二日のデイスカッション中心の熱っぽい会であった。参加者は十九名とスタッフ七名であった。
具体的なテーマは『地域づくりのためのアクションおこし』というものであった。

各地区で、このような活動者交流集会からセンターのアクションがスタートしたのである。

このように地域に Outreach を広げながら、センターのポジションをつかみ、ある企画(くわだて)を練っていた。

否、次から次へくわだてを練っていたと言った方が適切であろう。その一端を書きとめておこう。

昭和六十二年二月三日～四日に開催された通称「雪の集会」が、センターの方向を確実に示した記念すべき集会となった。

宮本初代所長の想いでセンター主催とせず、急ごしらえの実行委員会で行った。実際この会は直前に出来て、二月十四日には反省会をして解散している。まさにゲリラ活動的といってもいいと思う。我々普通の県人はシンポジウムのやり方、フォーラムの開き方さえ知らなかった。行政と市民の合意形成の一手段であることさえ知らない未熟さを『熱と夢』が乗り越えて行った。

テーマ『いまなぜ地域づくりか』

くらしの視点から考える。参加者総数四〇六名であった。

全国組織「自治体学会」の県内版を作ろうと、宮本元センター所長、岡田文淑前自治体学会運営委員(内子町)が呼びかけた。

それに応えて、久万古岩屋荘に野武士達約三十名が参集し、その日次のようなことを決めて、それぞれ県内へ散って行った。

一、約半年後二会ヲ設立スル
二、世話人ヲ決メテ

世話人代表 渡辺鬼子雄
世話人副代表 宮本 俊一
事務局 長 岡田 文淑
世話人 白石 高啓
島津 豊幸
若松 進一
渡辺 浩二
藤本 一三
井上 善一

以上

各地で研究会議発足の準備会が行われ、

内子座にて「えひめ地域づくり

研究会議」が産声をあげた。昭和六十二年十一月十四日であった。

研究会議の主な活動を列記してみる。

①総会フォーラムの開催。これらのほとんどは、センターと共催している。

②愛媛トイレ文化研究会発足の母体となる。

③ミニシンポ、地域課題を現地で開催。
④センター事業(例えば、TV会議、研究サロン、コンサルタント事業等)

⑤報道関係者との懇談会
⑥県事業、若者塾、女性塾などに参加、協力。

私としては、ボランティアである研究会議は、各自が目的を間違わず、生き生きと活動しておれば、それでいいと考えている。

最後にある年の研究会議の事業報告の中の、まちづくり総合センターとの協働作業という項を引用

してまとめとしたい。

『えひめ地域づくり研究会議は、これまで(財)愛媛県まちづくり総合センターの存在のもとに活動が維持され、継続されてきた。ボランティア集団のアキレス腱ともいえるべき事務局の所在は、組織活動を支える重要な機関である、その機関が(財)愛媛県まちづくり総合センターによって担われてきたことによつて組織活動が支えられた。この関係は今後も維持継続されなければならぬし、地域づくり運動の両輪として、双方が持つ機能を分かち合い、協働出来る環境を創り上げなければならない。』
そう心から願っている。



NETWORKING

特別寄稿

『地域づくりの中心は人づくり』

―他所から見た愛媛のまちづくり―



(財)地域活性化

センター

編集顧問

室井 澄生

平成三年十月、財地域活性化セ

ンターが全国の『地域おこし塾』

の実態を調べた。その資料による

と平成二年の『地域おこし塾』は

全国で四百六十一塾あり、およそ

一都道府県に十の『塾』の存在が

分かった。

平成二年といえは“ふるさと創

生事業”、いわゆる一億円事業が

実施された翌年である。ひところ

の地域振興策の代名詞でもあった

設備造り、つまりハコものづくり

から、その設備の中で“何がなさ

れようか”を模索したものだ。

国も“ふるさと創生事業”の中

心を『ソフト』とし、地域の住民

全体が集まって用途を論じ合った。

そんな時代背景もあって、地域

おこしは、モノづくりの時代から、

事柄づくり、物語りづくり、そし

て真の豊かさを求める『知』の追

求へと変化していく。

こうなれば地域づくりの動向も、

大きく変化する。つまり、地域づ

くりの中心が“人づくり”に変化

するからである。もともと、モノ

づくり、設備づくり、人づくりも

永遠のテーマであり、太古から繰

り返している人間の知恵である。

突出する愛媛県の塾数

さて、この調査で驚くべき集計

結果が二点出た。一つは愛媛県下

における『地域おこし塾』の数で

ある。全国で四百六十一塾、単純

計算で一県十塾の時代に愛媛県は

六十九塾を抱える全国一の勉強県

であった。ちなみに第二位は福島

県の三十、第三位は北海道の二十

九であるだけに、いかに愛媛県の

水準が高かったかが伺える。

さらに翌三年。全国数は六百と

なるが、愛媛県は七十四となり、

トップを維持した。

驚きの二点目は、運営主体であ

る。ごく一般的にみて、地域おこ

しの人材養成は行政主導型が多く、

市や町村の運営が多い。ところが

愛媛県では、平成三年の七十四塾

中、市町村などの行政運営が二十

五塾で、コミュニティを中心とし

た若ものの運営が十九塾もあった。

いってみれば愛媛県こそ、『地

域おこし塾』『人づくり塾』の先

進地でもある訳だ。

人間こそ資源

その傾向はその後の活動をみて

も顕著に受け継がれている。一昨

年夏、愛媛県が「ふるさとづくり

の第二ステージ」を発足させ、市

町村の若ものを集め、特に他府県

との交流を促進させた。第一回目

の集会に参加させて頂き、交流会

で夜ふけまで論議に花を咲かせた

が“人間こそ資源”とする愛媛県

人だけに、たった一度の出会いで、

私個人としても多くの人とのネッ

トワークを作らせて頂き、感銘深

い集会であった。

まちづくりのバランス感覚

愛媛県内の地域づくり活動は内

子町のように、農業を主体とした

町づくり、街並みを保存した美し

い町づくり、内子座を核とした芸

術の町づくり、といったように、

複合的な取り組みが目立つ。これ

は経済だけが町づくりではなく、

またイベントだけが町づくりでは

ない、といったバランス感覚の現

われではなからうか。このあと二

つの事例を紹介するが、ともに県

内では有名な存在。それを他所か

ら来た者が、どう感じたかをご紹

介する。

地域産業に対する

住民の愛着

新居浜市の「マイントピア別子」が工業都市再生の一方の柱として注目されている。普通、テーマパークは賑々しいイベントと、非日常性が売りもので、どの都市のテーマパークを訪ねても、ド派手な宣伝が目につく。

ところが、新居浜市の場合「遊



マイントピア別子

んで学ぶまち」「産業文化のまち」としたコンセプトが前面に掲げられ、大小の文化施設が目についた。

その新居浜市が文化都市に転進したのは、時代の変化に対応したことが大きな理由だ。日本三大銅山の一つに数えられた別子銅山を中心に栄えたまちが、銅山の閉山や関連重化学工業の衰退で、方向転換も止むを得なかった。

そんな時、市民の中から銅を生かした街づくり組織が結成され、市とともに「銅景（憧憬）のまちづくり」が提唱され出した。新居浜市の歴史的伝統と近代産業の展開を、まちの景観として生かそうというものである。

こうして造られた「マイントピア別子」は、開場三年間で二百万人もの観客を動員した。現場取材した筆者は『マイントピア別子、好調の原因は地域産業に対する住民の愛着だ』というタイトルでレポート記事を書いた。

二十年以上も続く

婦人学級

久万町の農村休暇村、第三セクターの林業会社、農家主婦による特産品づくりは、中山間地にある町村なら、どこに出しても参考になる事例である。ある縁から島根県川本町のまちづくり塾に関連し三年になる。

まちづくり塾の大きな目的に交流活動があるので、久万町を訪問先に選ばせて頂いた。川本町の小田町長をはじめ、約三十人の人達を案内したが、受け入れ側の久万町では河野町長以下、町を挙げての歓迎であった。

この町での感激は、二十年以上も続く婦人学級である。「自分たちがもっと勉強したい」という希望から、地道な努力が続いているのだ。今でこそ久万町の「桃太郎トマト」は有名だが、昭和四十年代、当時の減反政策による転作を迫られた時、「トマトでどうやって食って行くんだ」の声の中で、トマト作りを始めた。



久万町婦人学級

今、久万町は各集落の婦人たちが手づくりの特産品を久万町物産館「みどり」で販売、全国の人から注目されるが、原点は「おばさん達」の地味で気長な努力のような気がする。

都市と農村の交流をテーマに、地域住民の生きがいづくり。まちづくりとは、古いようで新しい、いや、新しいようで古い、繰り返しの中で進められている。

『インターネット風な

風が吹く』

過疎を

逆手にとる会

会長

安藤 周治



「ひとの時代」を考えた

今年も全国各地からご参加いただいた、十四回目の逆手塾を終えた。

ゲストは五人。愛媛県からも、双海町の若松進一さんをお迎えした。プログラムは、リレー講演会、ゲストをしゃぶる会、ジャズのセッションと例年に変わらない構成だったが、ご参加いただいた方々の多くから「すばらしい研修会」との評価をいただきホッとしていた。

また私自身も例年になく多くのことを考え、感じた逆手塾だった。

「ここが地球のど真中」が今回のテーマ。

カソサカの原点にかえて考えてみようというのが狙いである。

そんな中で、地域づくりとは関係ないと思われる「ひと」をゲストにお迎えした。山本文子さん。高松市にあるNTT高松病院の助産婦で産婦人科の婦長さんである。山本さんとは、一昨年の逆手塾が最初の出会ひ。以後お会いすることも多く、いつもお話に引き込まれた。「ひと」の根源である「性」の今日的状況は青少年と言わず、成人と言わず想像を絶するものがある。一方で「ひと」の性の営み

から発する「命」「愛」「親子」「家族」の尊さ優しさや温かさは掛け替えのないものである。今回の山本さんのお話もその「性」から始まる、いとおしさや優しさ尊さ温もりなどを語ってもらった。

カソサカと言うと、荒々しいほどに元気で、感動の波も嵐のごとくで、たたみかけるのが、ウリだと思われそうだが、今回は様子が少し違った。山本さんへの相談も何件かあつたらしいし、自分への問い直しをしてみるといったお手紙が何通か届いたと聞く。

地域づくりの勉強会で性教育。ミスマッチと思われそうだが、地域づくりはひとの営みである、ひとの営みの原点は「性」にあるイメージを上げると「ひとの時代」が少し見えてくる。やたら元気がいいばかりが、豊かな時代をつくるとは限らない。

「ひとの時代」の閃きはこんな思いである。地域づくりを考えるとき、市町村単位で眺めたり、グループや集団単位で見つめ、仕組みや組織運営、事業や活動などを

全体として捕らえる思考方法に、すっかりはまっていなかったかと反省する。集団を構成する個人一人ひとりにどれだけ迫りえたか、理解しあえたかという疑問がある。主役はひとである。ていねいにすなおに、ひとに迫ってみようではないかというのが、目指すところだ。

いま、カソサカは

組織が十五年も過ぎると、いささか疲労感が生まれ、期待感が無くなったりする。

我がカソサカも、中核になる十人ほどの顔ぶれが変わらないとなると尚さら人ごとではない。二カ月に一回程度、各地で勉強会を開いていたが、ここ数年は年に一、二回となった。それでもこれまでの成果か、逆手塾には多くの方々をお迎えし、定員一杯となる。

カソサカは、全国ネットの地域づくり集団であり、地域づくりの情報共同（協同）組合だといえる。逆手塾へおいでいただいたり、私や事務局長が、各地にお伺いして

出来上がったネットワークは大きな財産である。

地域づくり情報といえば、ひとの情報だ。どこで、だれが、どんなことをと、ひとを追いかける。ひとは動く。時々刻々変化する。情報は生き物だ。それだからこそカソサカの役割がある。あのまちで、今どんなうごきがあるのか。今のうごきが、私たちの手元には多くある。

講師の依頼もさることながら、視察先の紹介や依頼、商品の販売ルートの紹介をといった問い合わせも結構多い。地域づくりの情報共同（協同）組合としては、インターネットでカソサカのホームページを開けないかと議論している。運用経費のこともあるが、どんな情報が求められるか、何が重要なのかを見極めることが大切で、コンテンツ（情報の内容、質）が大きな課題である。

NPO（民間非営利組織）

から新時代を

カソサカには規約がない。組織

らしくない組織の運営。メンバー一人ひとりが浮き草のようであるが、連帯、連携の意識を持つ。協同（共同）の思いがある。そんな市民活動の実験中だ。インターネット風発想の組織運営とも言える。

阪神淡路大震災以後、ボランティア活動への評価が高まり、支援し推進するための法律の整備も具体化した。国などの政府も、私たち市民側もやっと市民活動に対する意識を変えてきた。普通のひとが、願っていること、求めていることを声に出し、仲間を募り、行動を始めた。当たり前と言えることなのだが、やっと自己実現のための主体を持ち始めたと言える。

一九九四年二月愛知県足助町の小澤庄一さんが教育長（現助役）になられたお祝いや「熟女と熟男が集まれば、プログラムがなくてもいい会ができる」とはじめたのが「じゅくじゅくじゅく」。昨年は奈良県の川上村で開いた。そして今年香川県の屋島での開催。先の山本文子さんが発起人となり、

町内会の皆さんや「わのわ」のみなさんが、「じゅくじゅくじゅく」が何なのかもわからぬまま準備に参画した。

そして開催、東京や横浜からも参加。地元からは多種多様な分野、年代の参加者で様々な話題が飛び交う。おじいちゃんは膝を前に進め、おばあちゃんの目が輝きを増した。「明日からあれをしよう。こんなことも」と行動計画の話の頃、時はすでに夜中になっていた。

「なにかをしたい」という思いのひとは多い。きっかけをつくる「場」が無いだけ。そしてやってみたいと思えるテーマを見つけてことができるかどうか。そして、そういったひとのお手伝いができる、「ひと」がいる。地域の新しいリーダー像はコーディネートのできるひとであろう。市民が主体的に考え、行動する時代がきている。

昨年、笹川平和財団から助成を受けて、NPO関連の調査を進めている。昨年は奈良県内の市民活動団体の実態調査と神戸のポ

ランティア団体の活動記録調査を、今年度は広島県と宮城県でNPO推進センター設立のための基礎調査をして、最終段階にある。

多様な市民活動が、安定して伸びやかな発展をすることが、我々一人ひとりにとって、豊かで幸せな生活を提供できる。そんな願いを夢見て、調査と検討会と全国ネットワークが動く。

愛媛県まちづくり総合センターがオープンして十年。多くの成果と実績を有し、隣県で活動する我々には、憧れのセンターの機能である。その機能を参考にさせていただきながら、一九九〇年中国・地域づくり交流会も発足させた。今、市民活動の支援と推進のためのセンターを構想している。今回も、まちづくり総合センターの成果と実績を、参考にさせていただきたいと願っている。

愛媛県と広島県の間で、ひとと情報の往来が、益々活発になるようにお願いしたい。

特別寄稿

『まちづくりは実践から』

御荘町役場 山岡 強
(客員研究員)



私流「まちづくり考」…

自分の生まれ育った町には、誰でも愛着がある筈である。しかし、人は様々な事情で「ふるさと」を後にする。それは就職であったり、結婚であったり、都会の生活に憧れたり…。そんな過疎の実情を人々は嘆き、なんとかしなければと色々な方策を試みる。そういう言われ方をする、残った我々が何か悪あがきをしているみたいで情けない様な気すらしてくる。

そもそも「まちづくり活動」というのは、自分たちの住む町や村をもっと素敵で魅力のある、本当に

住んでよかったと思える地域にしようとする活動であり、その根本は過疎対策のためにするものではないと思うのだが如何だろうか？

行政主導離脱のススメ…

我々の活動の基礎となったのは、平成四年から始まった誰もがお存じの「生活文化若者塾」である。しかし、行政の内部事情が変われば居心地も変わるのは当然の成り行きで、丁度おんぶにだっここの活動から脱皮しようと考えていた頃と合い重なり、民間の組織「ふるさと工房美翔」が誕生した。平成七年一月のことである。その後は、大きな壁に突き当たったり、「どこかの馬の骨か分からない…」と後ろ指を指されたり色々なことがあったが、住民を巻き込み行政を巻き込み、その度に心を豊かにしながら「自分育て」の活動を展開して

きた。それらの活動はいくつか新聞等で紹介され、それが会員の励みになっていることは言うまでもないが、何よりも、自分たちの活動に自信を持ち、昨日より今日、今日より明日と、日々の意識の高まりが、次の行動へと気持ちをかきたてていることも事実である。やらされている活動ではなく、自分たちで探る活動が大切だと思う。

何か違うような…

誰もが知っている「まちづくり」という言葉であるが、そういつた関係のシンポジウムやフォーラムに出席して話を聞いていると何やら難しい言葉で議論されすぎて、それが返って色んな意味で特別な人がやっている世界であるような感じがして、誰もが出来る可能性のあるその活動を近寄りたいたいのにしては様な気がしてならない。更にもっと始末の悪いのは、その方々と名刺交換や話をしたただけで、その方々のやってきたことを疑似体験している人々である。まちづくりは理論ではなく実践で

あるはずなのに。
我、ふるさとにて思いつ…

自分の住んでいる町をこよなく愛する人々には、誰にでも「まちづくり活動」をすることが出来る。そして、その町でしかやれないことってたくさんあると思う。環境問題、教育問題、福祉問題等どんな小さなことでも、コツコツと地道にやっていけば、何かが起きてくるのである。

「まちセン」では、色々な事を学ぶことが出来る。しかし、それを生かすも殺すも自分次第である。



僧津川河川敷公園のペインティング

特別寄稿

『まちセンで学んだこと』

西条市役所 国田 敦彦
(客員研究員)



まちセンを離れて三年半、過ぎさった過去を振り返った時、まちセンの二年間で貯めたまちづくりへのエネルギーを消費するばかりで、何の蓄積もできなかった自分が情けないやら歯がゆいやら、過去の舞たうんを読み返しながら、つくづくそう感じていきます。

現在は、まちづくりなどと大袈裟なものではありませんが、地域の中で自分でできる範囲のボランティア的な活動（PTA活動、自治会活動等）を行い、自己満足している状況です。

その中の一つが地方祭への関わりです。ご存じのように、西条市

は「水と祭りの町」として知られ、人々の祭りに対するエネルギーは並大抵のものではありません。ご多分にもれず、私も祭り大好き人間で、祭りの日はもちろんですが、何ヶ月も前から近所の人と酒を酌み交わしながら「おらが屋台」を美しく見せるためにはどうするかといった話に熱中しています。

このような考えは我々が青年団（ここでの青年団は屋台運営のための青年団）のころから現在の青年団にまでずっと引き継がれているものであり、そのエネルギーが西条祭りをより華やかで賑やかな祭りとして継続させているのだと思います。義務としてのイベント参加ではなく、自分からの積極的なイベントへの参加という形で…

このような祭りへの情熱が子ども頃から培われているのですから、都会に出ていった人が益・正

月には帰らなくても祭りには帰ってくるという状況も理解できると思います。

また、老若男女を問わず祭りを通して地域の人々が一体化し、祭りを盛り上げようとする気運がひしひしと伝わってきます。

かつて、まちセン時代に出会った方からご教示していただいた「自分の住んでるまち・むらに愛着を感じるのには、その町の歴史を体で感じ、歩んできたからだ」という言葉を祭りを通して、改めて実感している次第です。

自分たちでは自覚していないが、祭りという形で個々の地域への関わりが、地域の発展ひいては、まちの発展というまちづくりの一翼を担っているのではないのでしょうか。

何の自覚もなく祭りを楽しんできた自分にとって祭りを再考し、その意義を考えるようになったのは、やはりまちセンでの二年間に県内はもとより全国各地のまちづくりの先達の皆様にお会いして、その情熱や本音に接したからだ

思います。

そして、まちづくりの先達の皆様にその情熱や本音を具体的な言葉で表現していただき、具現化したものが「舞たうん」であったと思います。

「舞たうん」の中の言葉だけで、まちづくりへの思い全てを伝えることは、難しいことだとは思いますが、少しでも伝われば五十号を迎えた「舞たうん」の存在意義があるのではないのでしょうか。

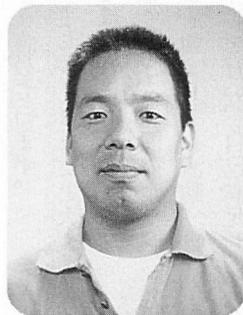
「舞たうん」はもちろんのこと、各種活動を通じて、まちづくりセンターが愛媛のまちづくり活動にますます貢献されることを期待しています。



西条人の心のふるさと 西条まつり。

特別寄稿

『まちづくりとパートナー』



吉田町まちづくり

実行委員会

薬師寺 浩 幸

町の農・漁・商業の後継者協議
会長になり、村おこしに関わる
ようになって五年余り経った。何
かをせよ！結果を出せ」と言われ

「リーダーにならなければ、リ
ーダーシップを取らなければ」と悩
み焦っていた頃、まずは人と出
会って話をすれば何かいい案が出
てくるだろうと県主催の「ふるさ
と再発見・創造塾」に参加し、お
かげで県下に仲間ができ何かと助
かっている。

そして、村おこし事業では、私
の所属している商工会青年部が補
助金等をいただき、その実施を任
されることとなった。そこで、同

部員を中心に部外者も加わり、企
画、観光開発、特産品開発等の活
動を進め、みかん生産日本とい
う町の財産を生かして「故郷、吉
田人間」をイメージし、町のマス
コットキャラクター「吉田君」と、
日本有数の真珠の生産地というこ
とで「あこや珠子ちゃん」の二つ
が生まれた。現在は、着ぐるみを
作り、イベント等で仲良く活躍し
ている。

そのほか、夏祭りには、手作り
御輿や人力車を製作し活用され
ている。

昨年は、NHKの番組で吉田町
を紹介していただいた。その番組

を見ていた滋賀県の吉田さんから
「吉田君の詩」を作詞作曲してプ
レゼントしていただき、町の歌と
してCDを制作し、子どもから大
人まで口ずさまれている。

また、来年あたりには、吉田高
校のダンス部が曲に合わせて創作
ダンスを発表しそうだ。

青年部員は、こうしたイベント
には、積極的に参加し盛り上げ、
町のにぎわいに大いに協力してい
る。そんな彼らのパワーの源は何
かといえば「酒」である。

しかし、「あいつらは酒ばっか
り飲んで何も考えとらん、町のこ
とも商店街のことも！騒ぐだけ
能じゃないぞ」というような声を
耳にすることもある。歌の文句に
「飲んで飲んで、飲まれて飲んで」
というのがあるが、飲まなきゃで
きないのではなく、飲んでみんな
と話し、その中から「今度は何す
る？何かせないけんの」というよ
うにどんどん話が進んでいく。雑
談から話題になり、提案になって
計画につながり、知らぬ間に完成
していることもある。

誰がリーダーでもない。誰かが
指示をしているのでもない。適材
適所が自然とでき、役割分担がで
きているのだ。しかし、この状態
は「村おこし、町おこし」が言わ
れ始めてからのことではないのだ。
私が、この数年間に勉強させてい
ただいた基本が既にできていたの
だ。

一人自己満足で鼻息荒く高ら
かに「人づくり云々、まちづくり云
々」と考えてきたことは何だった
のだろう・・・！

一年や二年でこの「連携・協調
の意識」が出来てきたのではなく、
ずっと前から底深く、住民が自分
たちの町を大切にし、愛する気持
ちがそうさせているんじゃないか
と思う。

町おこしは「ハイどうぞ、これ
です。結果が出ました。」とはい
かない。

じつと足元を見てみれば何か
あるのではないだろうか。一人で
頑張ってもしよせん一人の力なん
だから！

特別寄稿

『まちづくり活動と 青年会議所の役割』



(社)松山青年会議所

田中 啓文

創立以来四十数年間、松山市という「まち」を自分たちの出来る範囲で、より魅力的にしていこうと一致団結し、ボランティア活動を続けて参りました。

会議所二百名のメンバーによる毎月一回の各委員会活動により、その年度事業の具体的内容を煮詰め、決定していくことから始まります。

年に一度の「市民大清掃」、小学生と保護者の方々と共に専門の先生方の説明を受け、文化、歴史に触れる「句碑めぐり」。大街道、千舟町を練り歩く時代絵巻の「大名行列」。東京青年会議所の発案

により生まれた国技館での「わんぱく相撲全国大会」の松山場所運営。全国大会の宿舎はなんと相撲部屋で、現役力士と共にちゃんこ鍋を食します。

夏が来れば夏祭り、堀之内でメンバーによる手作り「お化け屋敷」。舞台からお化けまで作り(?)ます。ここでは善意の募金が入場料となっており、その収益金の行き先として、「わかっぱきファンド」という「公益信託松山青年会議所交通遺児等育英基金」を運営管理

いたしております。これは、先輩方が募金活動により集めた一千万円の金利により交通遺児数名に月

一万円の援助をさせて頂こうというもので、今は、様々な方々の協力募金等により四千万円の基金を有する迄になりました。ただ、今の低金利で活動を維持することが困難な為、メンバーによるチャリティゴルフ開催、街頭募金、催し物券販売による販売手数料収入等々により運営いたしております。

また、今、市民の方々はどんな松山を望んでいるのかを、テーマを決め語り合う「市民シンポジウム」を、ちんちん電車の中で、堀之内に浮かべた屋形船の中で、またある時は夜の松山城でお酒を飲みながら行って参りました。ジャンルベルの季節には、恋人達の語らいの舞台へと変えてしまう「堀之内ライトアップ」。このような活動をベースに「まちづくり」に取り組んでおります。また継続事業としてこれらの活動を行うだけでなく、新たなチャレンジも続けております。本年度は全国ろうあ者大会が松山で開催されるということで、問い合わせたところ正式

なご依頼を頂き、手話も出来ない我々ではありましたが、飛び込み参加させて頂きました。この活動を通して得たものは大変意義深いもので、とかくハードな部分のまちづくりへと走りがちな我々の意識を立ち止まらせ、本来人と人のふれあいからしか生まれたい喜びがあったことを思い起こさせ、「単なるネットワーク作りのみに励むのではなく、その中に温もりのあるコミュニケーションがあれば素敵なまちづくりはできないのでは?」と思わせる何かがありました。我々の活動は多くの方々のご協力、ご理解の上になりたっておりますが、その方々とのふれあいを当然のことと思わず、常に創造者としての意識を持ち、今後とも「ふるさと松山」を「わたし」として感じながら育てていくことが松山青年会議所のあり方ではないかと思っております。

『構造変動の時代と

まちづくりの課題』

松山大学経済学部教授

村上 克美



異常円高（九三年）、超円高（九四年）円高修正（九五年）等と呼ばれる円相場の推移にも示されているように、日本経済の最近の変動は留まるところを知らず、しかも構造的である。経済構造変動の第一はグローバル化の進展で現象的には海外生産の拡大、製品輸入の急増等を指す。いわば、ヒト、モノ、マネーなどのアジア規模、地球規模での展開が日常化していることを意味する。第二は国内総生産や就業者に占める広義のサービス産業の比率の拡大や知識、情

報等の重要性の飛躍的高揚を内容とするサービス化（ソフト化）である。市場が時間と空間によって分断される点などサービス現象には、モノ現象とは異質な特性が多く、サービス化の進行により経済は様変わりする。経済構造変動の

第三はマネー経済化である。外国為替市場や証券市場の取引高などで表示される金融経済がモノ、サービスの取引高や貿易高で測られる実物経済を圧倒することや両者の動きが連動しないことなどのトレンドをいう。グローバル化、サービス化、マネー経済化等は相互に影響し合い複合化することによって、さらに巨大で複雑な構造変動を生み出す。このような経済構造変動によって、従来の経済システム（国民経済やフルセット型産業構造）が崩壊しつつあるともいわれるのである（宮崎義一『国民経済の黄昏』九五年朝日選書）。

他方、住民の価値観も、この間構造的に変化した。「国民生活に関する世論調査」（総理府）の「今後の生活の仕方」への回答をみると、「ココロの豊かさ」をより重視する住民の比率は、「モノの豊かさ」を重視する住民の比率を逆

転した（七九年）以後も着実に増加し、近年では前者が後者のダブルスコアとなった。同じ調査の「充実感を感じる時」についても、かつては「家族団らん」と「仕事に打ち込む」が中心であったが、近年は他の項目（「ゆったりと休養」、「趣味やスポーツに熱中」など）の比率が急上昇し、全体的に平準化している。つまり充実感を感じる時も人によって様々で多元化の傾向が指摘できよう。こうして、高度成長やそのテコとなった勤勉、節約などのパラダイムが後退し、仕事優先から余暇優先への、勤勉から遊び志向への転換が進行する。目標のための手段であることを拒否し、その時その時をエンジョイしようという生き方やライフスタイルが若者を中心に支持されるようになった。こうして住民の価値観は著しく差別化され、場合によっては価値観の逆転がみられる。したがって現代は様々な意味で

「構造変動の時代」であると言っ
てよい。

ところで、このような構造変動
は地方にいかなる影響を与えるも
のであろうか。従来、地方圏はフ
ルセット型経済のもとで、費用要
因などにより主として量産型工業
製品の製造拠点あるいは農林漁業
など労働集約的な産業の拠点とし
ての役割を担ってきた。それだけ
にグローバル化など構造変動の直
撃をうけることになった。「東洋
経済」の全国自治体アンケート(対
象六八七都市、九五年)によれば、
地場産業、農林水産業、小売業、
観光業など多様な産業について
「不振が目立つ」とされ、「地方
の経済基盤はいま、大きく揺らい
でいる」との指摘がなされる。こ
れに過疎地域を中心にした人口面
の問題点(若年層の構造的流出、
高齢化の加速など)を考慮すると
地方の地盤沈下は避けがたい。逆
に価値観の多様化は余暇志向やふ
るさと志向の高揚を通じて、都市
と農村との交流人口や地方への定

住人口(UJリーマンによる)の
増加をもたらす可能性がある。こ
の点はUリーマン(転職者)の理
由(「自分らしい生き方をしたく
て」、「趣味を生かした仕事に就き
たい」、「子供を自然の中で生き生
きと育てたい」、「地域社会に貢献
したくて」など)からも推察でき
よう(月刊自治フォーラム)九三
年六月)。

こうして、構造変動のもたらす
地方へのインパクトには、マイナ
ス面ばかりではなく、プラス面も
あるといえよう。したがって、地
方圏でのまちづくりにとって、「構
造変動の時代」は、主体的条件な
どを中心に絶好のチャンスでもあ
る。

最後に、まちづくりの今後の課
題について若干列挙してみよう。

課題の第一は従来のまちづくり
の見直しについてである。すなわ
ち、まちづくりの現状を総点検し
従来とは異なる新しい視点(例え

ば余暇や文化などの視点)から思
い切つて見直すことが必要である。
これは現状を前向きにとらえる上
でも有効であろう。

第二はまちづくりの重点目標に
関してである。経済的条件でみる
限り地盤沈下が必至といえる地方
圏においては、地域産業の活性化
が最大のポイントになる。いくら
「ココロの豊かさ」がより重視さ
れる時代になったからといって、
経済的基盤を考慮していないまち
づくりビジョンは単なる作文でし
かない。地方圏での既存産業の活
性化にせよ、新規成長産業の導入
にせよ、新しい生活様式やユニ
ークなライフスタイルなどの提案や
実践と結びつかない限り地域産業
の振興は現実のものとならないで
あろう。

課題の第三は本来的な地域特性
や地域メリットの保全及び強化に
ついてである。個性的で魅力的な
まちづくりを展開するためには地
域がもともと持っている資源や特

性(自然環境、農林業、農村景観、
農村文化など)にさらに磨きをか
ける、付加価値をつけることが不
可欠で、それによってまちづくり
のポテンシャルが増大していく。
課題の第四は地域のポテンシャル
を十分に発揮するため、都市部と
の交流・連携を拡大する必要につ
いてである。とりわけ、余暇・娯
楽・文化機能を持ったハード、ソ
フト両面の基盤整備が重要である。

課題の第五はまちづくりの主体
に関してである。当然に住民、関
係諸団体、行政等の連携を強化し、
より一体となった取組が要請され
よう。



柳原 あや子



“歩いて見えたもの”

「リレーでちよつとトーク」の一ページに始まり、私の表紙絵も、よちよち歩きを始めました。気が付けば「舞たうん」に、半分携わってきました。私一人ではとても出合えない、多くの人の輪を「舞たうん」は築いています。

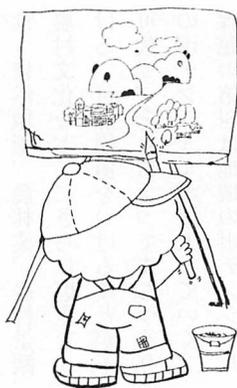
で、形の違い、比較、町の面白さが見えてきます。「動かなければ出合えない」、私の空き言葉の一つですが、動くことにより沢山の情報を得ます。そして歩くという速度により、今まで気付かなかった周囲まで見え始めます。車は確かに生活に必要です。瀬戸大橋に続き、四国も高速化し、著しく、変貌し始めました。本州と接近した分、車で走り去るだけの味気ない町にしたくありません。そして走る車も早い、家庭の電化製品も急速な伸び。例えば、食べたいメニューが、電子レンジで「チーン」と数分で口に入る手間のない、味気ない時代。常にスピードに追い掛けられ、いつの間にか使い捨てにすっかり慣らされています。江戸・明治・大正時代の文化、建築、道具はどうなってしまうのだろうか。私が観察してきた十年間でも、古い建

まちづくり雑感

物は、一瞬にして消えたと云っていい程、時代の移り変りを見ました。古いということは無用の長物でしょうか。保存の難しさもよく解ります。ただ、残念なのは、町並みに、肩を並べ連なった家が、一抜け、二抜けで、周囲の調和など考えてないことです。歯抜け状に残った旧家の両隣りが、駐車場・ビルでは美観とは程遠いものです。人の交流も切れてしまったような町になってしまわないだろうか。まちづくりに望むこと。私は人との交流が大切だと思えます。観光用の民家では、一度訪れば、それで納得。二度も訪れる魅力はあるでしょうか。内子町には学生や、住民に「こんにちは」とあいさつされる快さがあります。そして、私も生活感のあるこの町に、何か係わっているような嬉しさがあり、いつまでも心の奥に残る印象を持ち続けます。

私の触れ合いの宝物に、建築歴百七十年を有す、茅葺を守り続けた土居家のおばあちゃんとの出合いがあります。野村町惣川の庄屋に嫁いだ話から威厳を保って来た話と、お茶の接待を受け、周囲の大きな木に囲まれた、安らぎのある温もりに、何度か足を運びました。おばあちゃんの居ない今、保存の為、「一人一束」運動が着々と進み、住民が一つの輪になって、野村町の新しい交流の場として活用されようとしています。

住む人が、自然から学び、自然を理解し、産物を守り、この地にしか得られない大切な物が有るといふ、誇りを持つてほしい。私も歩いて出合える楽しみを大切に、「舞たうん」の出合いを大切に、頑張ります。



宇都宮 民



“マイナスがプラスに”

意中の人を紹介します。

その人は、小倉くめさん、五十才。季刊誌「秘めだるま」を十二年以上一人で出版し続けている女性です。

「秘めだるま」のネーミングには「愛媛の一障害女性が胸に秘め続けた思いを発信している」という意味が込められています。

くめさんには、先天性脊椎側湾症の障害があります。くめさん曰く「障害者に生まれたマイナスをプラスにかえる為、障害者問題にとりくむ「秘めだるま」の発行を始めた」のです。「ラジオエッセイ・くめさ

んの空」（南海放送ラジオ・日曜午前十一時三十五分）放送中）は、「くめさんの言葉をもっと多くの人に伝えたい」という、私の素直な感動からスタートし、五年目に入りました。社会を鋭く見る目と、故郷や家族へのあたたかい思い——、くめさんの生き方に「優しさ」と「強さ」を感じるので。

くめさんとの出会いから「人として生きる」ことを思うようになり、最近、それを実践している村の人達に会うことができました。越智郡関前村のボランティアグループ「だんだん」です。

関前村は、高齢化率四十三%（全国で三番目に高い）つまり、村の人口約千人のうち、四割以上が六十五才以上の高齢者なのです。

「だんだん」とは方言で「ありがとう」の意味で、ボランティアの活動は日常生活の中の気軽な助け合いがほとんど。

まちづくり雑感

例えば、「車の運転ができない人を病院やミカン畑まで送り迎えすること」や、「子守」「モーニングコール」等です。村全体が一つの家族・共同体としてネットワーク化されている、と感じました。

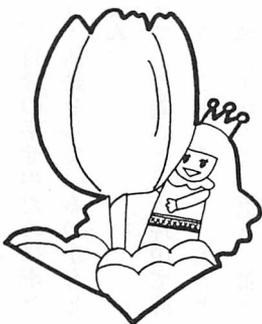
加えて、「だんだん」では、「タイム・ダラー」（アメリカ・マイアミ市を中心に実施されている時間預託ボランティアシステム）を取り入れ、一定時間のサービスに対しオリジナルのチップを渡します。瀬戸内海の小さな島で、アメリカ生れのボランティア・システムがしっかりと息づいているなんて、感動でした。

これぞ、発想の転換！ 超高齢化した小さな過疎の村というマイナスをプラスにして、これからの「人としての生き方」「地域のあり方」を提言しているではありませんか。マイナスをプラスにかえる、価値観をかえる——それは、まちおこしの成功例の中にも

ありました。例えば、双海町の夕日」。一般的には商品になるはずのない夕日が今や町の顔です。城川町の「かまぼこ板の絵」にしても、捨てられていたかまぼこ板に命が吹き込まれ全国から作品が集まっています。

どの町にもきつと、今はマイナスでも、これからプラスにかえることのできるものがあるはず。それに気付いた人が町を元気にし、そこに住む人達をイキイキとさせてくれるのでしょうか。

これからの「町おこし仕掛人」がんばれ！ マイナスをプラスにするのは「あなた（自分）次第です。



櫻 本 夕 子



“幸せになるために”

きっかけは、ちょっとしたことでした。自分の住んでいる町のことを少しでも知りたい、新しい出逢いが欲しい。そんな気持ちから町並みボランティアガイドを始めました。まさか自分がボランティアと名のつく事柄に足を踏み入れるとは、想像もしていませんでした。

間をほんの一、二時間都合して、自分流の言葉で楽しく案内をします。たったこれだけのことで、多くの方に感謝され、重宝がられれば、決していやな気持ちはしないはずです。

もちろん、歴史ある町並みの案内をするのですから、年号を覚えたり、やや難しい書をひもといたりという努力は多少?!いたしました。歴史という点、とても堅苦しいイメージがありますが、昔の人々の偉大さ、興味深い人間模様などが見えてきて、意外とすんなり頭の中に入っていくました。とはいっても知識的には他のガイドの方々の足元にも及びませんので、これからも勉強は続けていかななくてはと思っています。

いろいろな方が宇和町の町並みを見学に来られます。小学生、年配の方、いかにもまじめそうな団体、婦人会etc...とても熱心に聞いて

まちづくり雑感

てくださる方もいれば、ただなんとなく立ち寄ってみたという方などいろいろです。でも、最後に「ありがとう」と一言声をかけて下さると、なんともいえない満足感を味わうことができます。

オリンピックに出場する選手達が、昔は、「日本のため、チームのために競技するのだ」と語っていましたが、現在は、「自分のために出場し、力を尽くすのだ」とインタビューに答えています。そして、その笑顔は、とても輝いて魅力的に映りました。

私というちっぽけな人間が、宇和町のためにと必死で全精力を尽くしたとしても、町全体を動かし改革していくことなど到底できません。でも、宇和町を訪れた人たちの一人でも多くの人が、「宇和町に来て本当に良かった、また訪れてみたい」という気持ちをもってくれたら。そして、自分も充実した時間を過ごせる

のであればこの上ない幸せだと思います。結局、私は人のためだけでなく、自分の幸せのためにボランティア活動をしているのかもしれない。

今までただ若いという理由で許されてきたこと、そして、若さという特権にすがって、磨き、鍛えることのないままに育ち、豊かさについて、二十六才になってやっと考えるようになりました。妻として、母として生きるほかに一人の女性として、これからどんなことをすればよいのか、まだすべての答えは出ていませんが、三十才になったとき、どれだけ素敵な女性として成長しているか。今の私の課題です。

田舎に住んでいるから、主婦だから、小さい子供がいるから。それは、言い訳で、誰でもほんの少しの努力をすれば、それぞれの立場で必ずなにかひとつできることがあるはずなんです。あなたも日々の暮らしのなかで、つい置き忘れてしまふなにかを探してみたいかですか。

研究員レポート

森のくらしをデザインする

研究員 井上 正男

今年の県外研修で訪問した市町村のうち島根県匹見町についてレポートします。

《島根県匹見町の概要》

匹見町は県の西南部に位置し、広島県と山口県の県境に接した林野率96%の山村である。製炭、木材産業で繁栄したが、昭和三十年代頃から衰退し始めた。同町もご多分にもれず、過疎と高齢化が進み、現在は人口約二千二百人と最盛期の三分の一以下となっている。

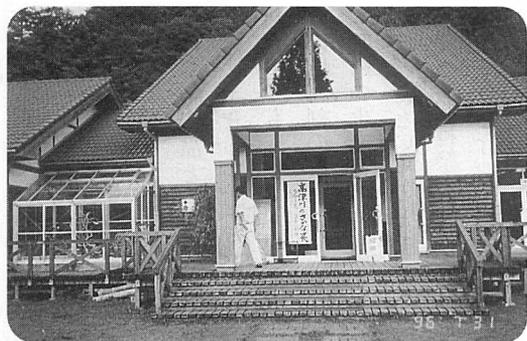
《匹見町のまちづくり活動》

1 「宝物探し」

物の見方や目線を変えれば、都会に住む人たちが羨ましがらる宝物があるはずだという考えのもと、宝物探しが始まった。そして議論を重ねた結果、匹見の宝物は昔から受け継がれてきた伝統的な「里山の生活」（自然の中で、自然の恩恵を授かりながら、人と自然とのいい関わりを保つ生活）である

とのコンセプトを得た。

最近、里山の生活様式を日常家庭生活の中で教え、学ぶスタイルが薄れている中、まず、手近なところから始めようということ、社会教育活動の一環として、「寿の会」（高齢者の組織）のメンバーの指導のもとに竹細工、山野草、つづら等の愛好者グループが育成されました。その効果として、「つづら」がこの愛好者グループの手によって生き返り、その結果、「森を大切に」という思想が地域住民に今まで以上に浸透した。



ウッドパーク

2 「ウッドパーク」の役割

これらの活動拠点、成果としての作品発表の場、交流の場として「ウッドパーク」が誕生した。ここでは、作品を売るために作るのではなく、学び作るプロセスを楽しむことを「モットー」としている。まちづくりは人づくりといわれるように「ウッドパーク」では、数多くの教室・セミナー等を開くとともに、足まめに地域まで出向き、きめのこまかい社会教育活動を行っている。そして将来、ここに関わる人達が教養と技術の両方を吸収し、精神的かつ経済的にも豊かな生活が出来るよう指導が出来る「森の学校」（学校法人）づくりを目指している。

3 「森の器」の誕生

当地の森林産業は、主に天然樹林に依存していたため広葉樹林（七十%）が多く残っている。匹見産の百一種類もの広葉樹木を使って、木目を活かした本物志向の全国一を誇る木の器（茶碗、皿、盆等）に加工し、「森の器」として展示、販売され、好評を博して

いる。当初は加工する道具もなく、材質や目的にあった道具から手作りし、塗装にもいろいろ苦労を重ねたそうである。



森の器と作品群

《終わりに》

大奮発して買った木の茶碗で食事をする度、匹見町でまちづくりに携わる方々の「思い入れ」や「こだわり」を思い出す今日この頃です。最後になりましたが、ご多忙中もかかわりませず、ご親切にご対応頂きました方々に紙面を借りましてお礼申し上げます。

「石のかなたに」

研究員 稲田 紹

全国に数ある先進地、その中から、何処にしようかと迷っていた私は、まず日本地図を広げて見た。『パツ』と目に飛び込んだきた(一)のは九州、それも「火の国」といわれ、まちづくりの先進地である熊本県だった。その市町村の中から「しょうが」と「石工の里」ということで全国に発信している八代郡東陽村にスポットを当てて訪問研修をしてきた。

《むらの概要》

東陽村は、熊本県の西南部に位置し、全面積(約六十四㎏)の八十五%が山林であり、豊かな自然に恵まれた、人口約三千人の村です。

村の主な産業は農業で、しょうがを中心に、米、果樹等を栽培しています。

どこの市町村でも重要な課題だと思ふのですが、人口の約四分の一(約七百五十人)がお年寄りで

高齢化が進んでいるとのことであり、様々な高齢化対策を試みてるところです。

《むらの特産品》

村の特産品といえば「みかん」「エノキ苜」「しょうが」等があり、中でも「しょうが」は、村内のほぼ九割の農家で栽培され、熊本県内の生産量の約四〇%を占めるほどだということです。

元々、収穫祭として「しょうが」の品評会を行ってきた「しょうが祭」も平成八年で二十一回目を迎え、毎年十月下旬頃に開催されます。

村の特産品である「しょうが」の価値を高めようということで、お菓子、漬物、飲料水、浴用剤、名刺等を開発しました。

村では、その特産品を活かせる企業誘致、観光開発等により、宣伝、販売をしていこうと計画中です。

《石工の里づくり》

この東陽村は江戸末期から大正初期にかけて、全国に数多くの目鑑橋めがねを架けた石工たち(藤原林七、

岩永三五郎、橋本勘五郎等)の発祥の地だということです。

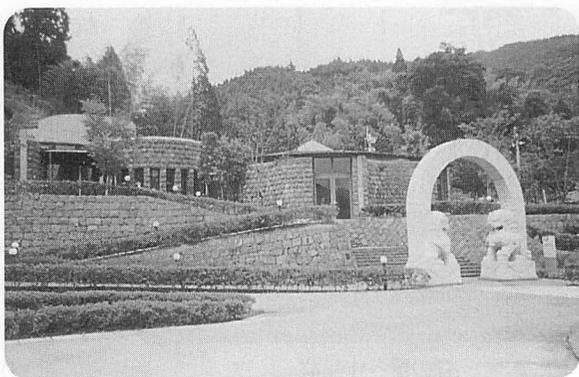
当時、「種山石工」と呼ばれ、その技術は日本一と言われていました。その手掛けた有名な橋の例として、東京の「日本橋」や「皇居の二重橋」などは、名工といわれた橋本勘五郎の造った作品です。当初、石工技術は、ヨーロッパや中国から伝わってきたそうです。そして、この名工たちによって発展していったと言つても過言ではないと思います。

平成五年、その石工たちの歴史や、その文化を今一度蘇らせ、新しい地域文化を創造していこうというところで、すべて地元で採れる凝灰岩を使って建築されたのが、石の里歴史資料館「石匠館」です。

平成七年度までの入場者が約三万五千人ということで、これからもっともっと増えてくるだろうと思ひます。

《最後に》

企画広報課長「志水さん」の村への熱い想いと「石匠館」館長「古田清秀さん」の「石」へのこだわりがひしひしと伝わってきました。このような熱意のある方たちがいるということで、東陽村のこれからの「まちづくり」はもっともつと拡がっていくだろうと思ひます。ご多忙のところ、懇切丁寧に説明してくださった志水課長はじめ、各担当者の方に、誌面を借りまして、厚くお礼申し上げます。



石の里歴史資料館「石匠館」

まちづくり 一言

研究員 OB有志

はや、設立後十年かど、不思議な感慨があります。

当時、「地域づくりのキーポイントは『人』なり」、との宮本所長の強い信念に基づき、手さぐりで活動を開始したことを、なつかしく思い出します。

山本 均

設立当初の第一期生として、初代宮本所長や他の研究員と共に暗中模索の中、センターの果たすべき役割や地域づくりとは何か等々真剣に議論し行動したことを思い出す。当時得た糧は、今の仕事（「A金融指導」に充分役立っている。

現センターには行動力を期待！

井口 浩志

バブルははじけたというのに、携帯電話が氾濫し、情報化といえども、電車の中や歩きながら通話するほど急いで、どうなるというものか。生活ゴミも産業ゴミも増える一方である。

新しいコト、モノを再考し、全ての領域でコンセプトは「減」。

宮本 清幸

特産品開発、イベント、シンポジウムがまちづくり三種の神器と言われた時代から、環境、生活文

化、デザイン、本物などといった言葉がキーワードへと変わってきた。しかし、そこに「人」がいることだけは変わっていない。

近藤 誠

宮本元所長さんのもと、研究員二期生としての二年間は本業から完全に「ワープ」し、学び多き経験でした。バブルが過ぎ地域の明日が不透明な時代にこそ「まちセン」の果たす役割は大きく、さらに不変のものと確信しております。ますますのご活躍を！

幸地 慎一

舞たうん五十号おめでとございます。継続は力なりました。誌上にご投稿いただいた方も多数にのほり、地域づくりネットワークの確かな広がりを感じます。地域づくりとは本来地道なものです。晴れの場も必要ですね。まちセンの一層の御発展を祈ります。

山本 幹男

「舞たうん」五十号の発刊おめ

でとうございます。

一つ一つの積み重ねを大切に、今後も県内外のまちづくりの情報ネットワーク誌として、発刊されますことを念願いたしますとともに、センター設立十年、今後ますますのパワーアップを期待します。

上ノ田 誠一

「まちセン」在籍中には、まちづくり？いや人生の先輩から沢山のことを教えていただきました。その思いを胸に、郷里の未来を頭に描き、いざ郷里へ帰ってみると、いつの間にかその思いは薄れ、与えられた仕事に終われる毎日を送っております。これではいかん！

富永 廣次

センターにお世話になってから早いもので、六年が過ぎようとしている。一生懸命に様々な地域やひととの出会いを、自分づくりの大きな心の糧として、活きていきたいと願っています。ありがとうございます。

松森 陽太郎

《まちセン資料集》

まちづくりセンターの機能の拡充が、県の施策の一つに掲げられていたが、設立十年目という節目の年を迎え、今後とも素晴らしい「ふるさと愛媛」づくりの先導者として活動されますことを祈念します。

松岡正範

平成五年度の一年間でしたが、センターでは大変お世話になりました。ふるさとに思いをよせ、自分が燃えて、そして楽しみながら取り組むことの大切さを学びました。現在、役場では農林業振興の分野、地区では公民館分館の主事としてがんばっています。

石家 清

最近、親愛なる友を失い、「命の尊さ、世の無常」を今さらながら痛感した。短かい人生の中で、喜びや悲しみを体験しながら、強く優しく温かく生きる術を身につけていくものと信じている。しかし、これも「心」の持ちよう次第ではあるのだろうか……。

尾崎弘典

センター十周年、舞たうん五十号、おめでとうございます。

今後、県内まちづくりの起爆剤として、また全国への情報発信基地として、さらなる活躍をされることを、お祈りします。

藤田 良

さりげなく、夢やロマンを語るまちセン。十回目の誕生日おめでとう！

いつまでも、いつまでも我々の心よりどこまであってください。

まちセンのますますのご発展をお祈り申し上げます。

竹松 毅

舞たうん発刊五十号おめでとうございます。まちセンにおいて舞たうんは、研究員活動の集大成。

取材を通じて物事や人の心のなごたるかを深く考えさせていただきました。ぜひ百号に向け、まちづくり人のバイブルとなるよう発展を期待しています。

酒井康次

刊 行 物 一 覧

- 情報誌「舞たうん」(VOL.1～VOL.50)
- 情報誌「えひめイベントBOX」(VOL.1～VOL.17)
- まちづくり草の根文化講演集(1～9)
- 地域づくり交流研修レポート(1～10)
- えひめ地域づくり活動者集会レポート
- 「いま、なぜ「地域づくり」か」くらしの視点から考える
(昭和62年10月刊行)
- 愛媛ニューまちづくりテレビ会議記録
キーワードは「遊」！これからの地域づくり(昭和63年刊行)
- 地域づくりTV会議記録
遊び半分……地域づくり未来戦略
(平成2年2月刊行)
- 「市町村の振興基本計画を考える」
ーシンポジウム報告書ー
(平成2年2月刊行)
- 「90えひめ地域づくり活動者集会」記録集
「再考/いま、なぜ「地域づくり」なのか」くらしの視点
から、地域の未来づくりを
(平成3年3月刊行)
- 地域づくり研究サロンの記録集
・ 特産品開発は、地域の活性化戦略になりうるか！
(平成3年10月刊行)
- ・ まちを素敵に、私の求めるまちづくり
(平成7年3月刊行)
- えひめのまち・むらー夢・未来ー(えひめまちづくり調査)
(平成5年3月刊行)

年譜 (まちづくりセンター10年)

《まちセン資料集》

平成元年	昭和63年	昭和62年	昭和61年	昭和60年
<p>4月～3月 10月～2月</p> <p>「地域づくり研究サロン」の開催(現 継続中) 「西瀬戸地域／ニューウェーブTV会議」の開催</p>	<p>2月～3月 7月～3月 7月～3月 10月 10月 11月</p> <p>「えひめ地域づくり研究会」の開催 「ミニ・シンポ「課題別研究会」の開催 「愛媛トイレ文」研究会」の開催 「先進地域交流研修ツアー」の開催(まちづくり・むらおこし交流研修ツアーの改称) 「愛媛ニューまちづくりテレビ会議」の開催 全国「木」のフォーラムの共催(久万町)</p>	<p>9月～10月 10月 10月 11月 12月</p> <p>「えひめ地域づくり研究会」の開催 「まちづくり・むらおこし交流研修ツアー」の実施 「ミニ・シンポ／地域イベント再考」の開催 「えひめ地域づくり研究会」の開催 「西瀬戸むらおこしテレビ会議」の開催</p>	<p>2月 3月 3月 3月 5月 9月 11月 12月</p> <p>「えひめ地域づくり活動者集会」の開催 新理事長に伊賀貞雪氏就任 情報誌「えひめイベントBOX」刊行(現在継続中) 「えひめ地域づくり研究会」設立発起人会 「まちづくり・むらおこし交流研修ツアー」の実施 「ミニ・シンポ」刊行(現在継続中) 「えひめ地域づくり研究会」の開催 「西瀬戸むらおこしテレビ会議」の開催</p>	<p>8月</p> <p>愛媛県シンクタンクの研究レポート「まちづくりについて」においてセンターの設立を知事に提言 市町村総合情報センター設立検討委員 会 充足</p>

平成8年	平成7年	平成6年	平成5年	平成4年	平成3年	平成2年	平成元年
<p>7月 11月</p> <p>財団法人愛媛県まちづくり総合センター設立10周年 「地域づくり交流促進事業」の実施</p>	<p>4月 10月</p> <p>全国まちづくり情報による情報提供開始 「地域づくり交流研修」の実施(地域づくり先進地交流研修の改称)</p>	<p>2月～3月 4月～3月</p> <p>「ふるさとコンサルティング事業」の推進事業の実施 全国まちづくり情報のデータベース化</p>	<p>2月 9月～12月 12月～3月</p> <p>「ふるさとコンサルティング事業」の開催 「まちづくり研究アシスト事業」の実施 全国まちづくり調査の実施</p>	<p>2月 3月 8月～3月 11月～3月</p> <p>「まちづくり草の根文化講演会」の開催 「地域づくり助言活動システム事業」の開催 「ふるさとコンサルティング事業」の実施 「まちづくり調査研究の実施」 「えひめのまち・むら・夢・未来」として編集・刊行</p>	<p>5月 11月 11月</p> <p>地域の「広域イベント」の支援(三崎町ほか) 「地域づくり先進地交流研修」の実施(先 地域交流 研修ツアーの改称) 業務所移転(県農 業試験場から県生活保健ビルへ)</p>	<p>5月～7月 9月～3月 11月</p> <p>「ブロック別地域問題研究会」の開催 「地域づくり助言活動システム事業」の開催 「地域自立をめざす「元気アップ」交流」の開催</p>	<p>11月 11月～3月</p> <p>「地域づくりプロデュース事例研究」の実施 「地域活動アドバイス事業」の実施</p>

《まちセン資料集》

○ 舞たうん特集テーマ一覧 ○



VOL 1	62年10月	イベント裏ばなし
VOL 2	62年12月	美しい環境で暮らしたい
VOL 3	63年 2月	農業・むら特集
VOL 4	63年 4月	五感のまちづくり
VOL 5	63年 6月	むら
VOL 6	63年 8月	商店街
VOL 7	63年10月	花みち
VOL 8	63年12月	な・か・ま
VOL 9	元年 2月	交流
VOL 10	元年 4月	くらしの風景
VOL 11	元年 6月	地域・かかわり
VOL 12	元年 8月	海外の旅から
VOL 13	元年10月	地域の暮らし “生産と流通”
VOL 14	元年12月	明日のまちづくり -子供たちとともに-
VOL 15	2年 2月	明日の暮らし創造
VOL 16	2年 4月	暮らしからの地域賛歌
VOL 17	2年 6月	島でイキイキ!
VOL 18	2年 8月	五感とやすらぎ
VOL 19	2年10月	地域と二人三脚 “青年団”
VOL 20	2年12月	実感!大地に生。
VOL 21	3年 2月	集落づくり未来戦略
VOL 22	3年 4月	夢はふくらむ
VOL 23	3年 6月	地域づくり、わたしの役割
VOL 24	3年 8月	われら健康地域
VOL 25	3年10月	まちづくりと国際交流
VOL 26	3年12月	EVENT サイコウ
VOL 27	4年 2月	暮らしと環境 「水と緑から自然環境を考える」
VOL 28	4年 4月	暮らしと環境 「ゴミと雑排水から生活環境を考える」
VOL 29	4年 6月	暮らしと環境 「美観から社会環境を考える」
VOL 30	4年 8月	暮らしと文化 「歴史文化とまちづくり」
VOL 31	4年10月	暮らしと文化 「芸術文化とまちづくり」
VOL 32	4年12月	暮らしと文化 「伝統文化とまちづくり」
VOL 33	5年 2月	交流 「地域 新たな展開を求めて」
VOL 34	5年 4月	交流 「人 ふれあいを求めて」
VOL 35	5年 6月	交流 「国際交流」
VOL 36	5年 8月	やさしさを探る 「やすらぎのあるまち」
VOL 37	5年10月	やさしさを探る 「ふれあいのなかから」
VOL 38	5年12月	地域の顔をつくる 「地域資源を活かして」
VOL 39	6年 2月	地域の顔をつくる 「自然を活かして」
VOL 40	6年 4月	地域の顔をつくる 「地域イメージの創出」
VOL 41	6年 7月	地域を担う人材育成 -まちづくり塾から- 「地域から学ぶ」
VOL 42	6年10月	地域を担う人材育成 -まちづくり塾から- 「心地よい汗」
VOL 43	7年 1月	地域を担う人材育成 -まちづくり塾から- 「まちづくりネットワーク」
VOL 44	7年 4月	長寿社会 -真の豊かさを求めて- 私と地域とのかかわり -生涯現役-
VOL 45	7年 7月	長寿社会 -真の豊かさを求めて- 地域を拓く若者たち
VOL 46	7年10月	長寿社会 -真の豊かさを求めて- 地域を支えるネットワーク
VOL 47	8年 1月	長寿社会 -真の豊かさを求めて- 交流広場
VOL 48	8年 4月	パートナーシップのまちづくり -まちづくりグループの活動から-
VOL 49	8年 7月	パートナーシップのまちづくり -女性グループの活動から-

お 知 ら せ

「えひめ地域づくり研究会議 '96年度フォーラム」開催
テーマ 『次世代へのプロローグ』
—地域にくらしのアメニティを築く—

- ◇と き 平成9年1月25日(土)
◇と ころ 松山市三番町「えひめ共済会館」
◇主 催 えひめ地域づくり研究会議・(財)愛媛県まちづくり総合センター
◇内 容 9:00 受 付
10:00 開 会

【第1部】

- 10:10 新えひめ地域づくり活動支援事業活動報告
・玉川町地域づくり研究会源流
・久万町管生愛護班
・三崎町さきがけ橘塾

【第2部】

- 10:35 まちづくり実践塾
10:40 第一時限

「一人は万人のため、万人は一人のため」
医療生協のまちづくり—WASH運動の展開—
講師：愛媛医療生協専務理事 富長 泰行 氏

- 12:30 昼 食

- 13:30 第二時限

「終わりなき創造—湯布院まちづくり物語—」
講師：レストラン&ギャラリー「南の風」オーナー 田井 修二 氏

- 15:30 第三時限

「まちづくり文化事業—瀬戸田町の歩み—」
講師：前瀬戸田町長 和氣 成祥 氏

【第3部】

- 18:00 交流会
20:00 閉 会

- ◇参加費 フォーラム 2,000円 交流会 5,000円 昼食 800円
◇その他 申込み等、詳しいことは(財)愛媛県まちづくり総合センター内
「えひめ地域づくり研究会議」事務局まで

年末の慌ただしさの中にも、
新年への期待で、充実した
毎日を送られていることと思
います。

今年も色々な事件等があり、
激動の一年でしたが、来年は、
落ちついたいい年になることを
念願しております。

内容についてのご意見や活動
内容についての記事など、お気
軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係まで

〒790 松山市三番町八丁目

一三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 089(932)7750

FAX 089(932)7760

発行/平成八年十二月二十日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

(財)愛媛県市町村振興協会